

Title	地図を脱構築する
Author	ハーリー, ブライアン / 田中, 雅大[訳]
Citation	空間・社会・地理思想. 23 巻, p.123-148.
Issue Date	2020-03-13
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科
Description	Cartographica 26(2), pp.1-20, 1989, DOI: 10.3138/E635-7827-1757-9T53 / Reprinted with permission from University of Toronto Press (https://utpjournals.press)
DOI	

Placed on: Osaka City University

地図を脱構築する

ブライアン・ハーリー*
(田中 雅大** 訳)

J. Brian Harley

Deconstructing the Map

Cartographica 26(2), pp. 1-20, 1989, DOI: 10.3138/E635-7827-1757-9T53

Reprinted with permission from University of Toronto Press (<https://utpjournals.press>)

要旨: 本稿は、地図の性質を権力の表象として再定義するために、ポストモダンの思考の分野にある発想を利用する。第一に、カルトグラフィーの伝統的な規則——長きにわたり、地図を知識の客観的形態とみなす科学的な認識論に根差している——を脱構築の対象として再検討する。第二に、脱構築者の議論をもとに、隠喩的・修辭的性質を含む地図のテクスト性を探る。第三に、場所の地図表象における外的権力の側面および内的権力の遍在の側面を検討する。

地図は話しかける。「私を注意深く読み、忠実についていらっしゃい。疑わずに。私はあなたの手のひらに載った地球。私なしではあなたは独りぼつちで迷子になる」

そのとおりだ。悪辣な意図のもと、この世のすべての地図が破壊され、消えてしまったら、人間はふたたび無知へと退化し、すべての都市は別の都市と切り離され、ランドマークは道しるべとしての意味をもたなくなる。

だが、じっと見つめ、心で感じ、指でなぞつても、地図そのものは冷たい。カリパスと製図機から生まれたユーモアのない退屈なものだ。あの海岸線はこれ。真っ赤なインクのぎざぎざの線。そこには砂もなく、海もなく、岩もない。風いだ海で帆をいっぱい広げたまま立ち往生している船乗りもいない。羊の皮や木の板に描かれた地図は、後世の人びとにはまったく無価値のいたずら書きに見えるかもしれない。山を意味するこの茶色の染みは、無造作に見たら何の意味もない。だが、二十人か十人か、あるいはたった一人かもしれないが、誰かが命がけで登った山だ。ここに谷、あそこに沼、そしてこれは砂漠。ここには川がある。好奇心に突き動かされた誰かが勇敢にも足から血を流しつつ——神が手にした鉛筆のように——線を引いた川。

ベリル・マーカム、1983年¹⁾

カルトグラフィー^{訳注1)}の歴史における概念的検討——地図のオルタナティブな理解の仕方の探索——のペースは遅い。その成果はほとんどうわべだけにすぎない、と述べる者もいるだろう。カルトグラ

フィーの歴史に文学史の概念を適用すれば、依然としてわれわれは、かなりの部分において「ポストモダン」ではなく「プレモダン」、または「モダン」の思潮で研究しているように思われる²⁾。個々の探究をまとめたリストの中に印象的なものが含まれているのは確かであろう。いまや、われわれの生徒は、情報理論、言語学、記号論、構造主義、現象学、開発論、解釈学、図像学、マルクス主義、イデオロギーの発想に依拠する著作に注意を向けることができる。われわれは、(数ある中でも特に)カッシーラー、ゴンブリッチ、ピアジェ、パノフスキー、クーン、バルト、エーコといった、本稿の脚注にいる人物の名前を挙げるができる。しかし、これらの変化の兆候が見られるにもかかわらず、われわれは否応なしに、依然として自分たちの過去に囚われている。

本稿における筆者の基本的な主張は、われわれはカルトグラフィーの性質を解釈する方法に認識論的転換を促すべきだということである。カルトグラフィーの歴史を研究する者にとっては、カルトグラファーが地図とはこうあるべきだと言っていることへの幅広い合意を、ごくわずかな異論はあるものの、われわれが依然として無批判に受け入れていることが理解を妨げる大きな障壁である、と筆者は考えている。特にわれわれは、地図を作る者たちは何の疑問も抱かずに「科学的」または「客観的」なかたちで知識の創造に取り組んでいる、という前提にもとづいて研究しがちである。もちろんカルトグラファーは、信頼を維持するために自分たちはそう言わなければならない、と考えているだろうが、歴史を研究する者はそのような義務を負わない。われわれは、カル

* ウィスコンシン大学ミルウォーキー校

** 日本学術振興会特別研究員 名古屋大学大学院環境学研究所

トグラフィーがカルトグラファーの言う通りのものであることはもったにない、という前提から始めた方がよい。

コンピュータに支えられた手法や地理情報システムをカルトグラファーたちが採用するにつれて、地図を作る者たちの科学的な修辭がさらに耳障りになってきている。「技法の文化culture of technics」がいたるところにはびこっている。現在は*The American Cartographer*という名前である学術雑誌が、これからは*Cartography and Geographical Information Systems*になるという。あるいは、英国地図学協会British Cartographic Societyは、地図の性質に向かって奇妙な両義的振る舞いをとりながら、カルトグラフィーには二つの定義があるべきだと提案している。「一つは専門的なカルトグラフィーにとっての、もう一つは一般市民にとっての」定義である。「一般市民とのコミュニケーションにおいて使うための」定義は、「カルトグラフィーとは地図作成の芸術、科学、技術technologyである」だろう。「実践するカルトグラファー」にとっては、「カルトグラフィーとは地理的關係を分析・解釈し、地図という手法によってその結果を伝達する科学および技術である」だろう³⁾。多くの人は、もはや「専門的な」カルトグラフィーに「芸術」が存在していないことを意外に思うかもしれない。しかし、現在の状況を踏まえれば、これらの存在論的な統合失調症ontological schizophreniaの兆しは、急いで異なる視点で地図の性質を再考する必要がある、ということの反映としても読み取れるだろう。進歩的科学という考え〔カルトグラフィーは進歩的科学であるという考え〕は、ある程度カルトグラファーたちが自分たちの専門性を発展させていく中で創り出した神話なのではないか、という疑問が生じる。筆者は、広範な市民および地図を用いて研究する他分野の学者によってその神話があまりにも無批判に受け入れられてきた、ということを変えたい⁴⁾。地図の歴史に関心のある人々にとっては、われわれがカルトグラファーの前提を疑うことは、極めて時宜にかなっている。実際、カルトグラフィーの歴史なるものが人文学や社会科学の中で学際的な主題として発展するものだとすれば、新しい発想が必要不可欠である。

いかにしてわれわれはカルトグラフィーの歴史を研究する者としてその規範的モデルから逃れることができるか、が問題となる。いかにしてわれわれは新しい発想を受け入れることができるか。いかにしてわれわれは、(17世紀のパリの地図を背景とする)ルイ・マランの「王と幾何学者」や、(17世紀に初

めてアメリカを示した世界地図を背景とする)ウィリアム・ボエルハワーの「地図の文化」⁵⁾と同じくらい本物の修正主義者として、カルトグラフィーの歴史の記述に着手できるか。これら二つの研究はポストモダニズムから知見を得ている。筆者も本稿で地図の脱構築をねらった戦略を採用する。

脱構築という概念⁶⁾はポストモダンの企てにとつて合言葉でもある。脱構築者の戦略は、いまや哲学だけでなく特定の学問領域、特に文学、また建築学や都市計画、より最近では地理学といった他の分野においても見られる⁷⁾。筆者は特に、地図的思考を支配し、啓蒙主義時代以降それを「通常科学」の道へと導き、カルトグラフィーの歴史に既成かつ「当然」の認識論を与えてきた、現実と表象の間に仮定されたつながりを壊すために、脱構築者の戦略を利用する。本稿の目的は、カルトグラフィーの歴史にとつては科学的な実証主義ではなく社会理論にもとづくオルタナティブな認識論の方が適切だと提案することである。本稿によって、「科学的な」地図でさえも、「幾何学的理性的次元の規則」の産物であるだけでなく、「社会的(…)伝統の次元の規範と価値」の産物でもあることが示されるだろう⁸⁾。われわれの課題は、カルトグラフィーを構築してきた社会的な力forceを探り、権力powerの存在——およびその影響——をすべての地図知map knowledgeに位置づけることである。

この風変わりな小論の発想は、大部分がフーコーとデリダの著作にもとづいている。筆者のアプローチはあえて折衷的であるが、それは、これら二人の著者の理論的立場がいくつかの点で両立しがたいことに理由がある。フーコーはテキストを社会-政治的現実固定し、デリダが解体したがる種類の知識を組織するための体系を構築する⁹⁾。しかしそうだとしても、新しい領域の上で異なる発想を組み合わせることで、われわれがカルトグラフィーの隠れた意図agendaの探求に着手することを可能にする社会理論のスキーム、を考案できるかもしれない。そのようなスキームは、地図資料の歴史的解釈の「解決法」を示すわけでも、厳格な方法または諸技法techniquesを提示するわけでもない。むしろ、それは幅広い戦略として、ヨーロッパと非ヨーロッパの両方の地図作成を突き動かしてきたいくつかの根本的な力を位置づけることに役立つだろう。フーコーの著作によって暴かれた重要な事実は、すべての知識に権力が遍在しているということである。たとえ権力が不可視なもの、または暗示されるものとしてもそうであり、そこには地図や地図帳に符号化さ

れた知識も含まれる。すべてのテキストの修辭性に
関するデリダの考えも同じくらい挑戦的である¹⁰⁾。
それは、これまで研究者たちが測量と地形図のみに
見出していた地図の中の隠喩と修辭を探ることを求
める。その中心的な問いは、「地図は領土ではない
the map is not territory」というコージブスキーの古
い言葉¹¹⁾を連想させるが、脱構築はさらに進んで、
地図は場所をどのように表象するかという問題に非
常に鋭い視点をもたらす。

脱構築はわれわれに地図の行間——「地図の余白」
——を読み取ることを、そしてその比喩表現trope
を介して、画像image^{訳注2)}の見かけ上の正直さに抗う
沈黙と矛盾を発見することを求める。われわれは、
地図の事実は特定の文化的視角の中でのみ事実であ
る、ということを知り始める。地図はどれほど芸術
のように「世界に対して透明に開かれた」状態からか
け離れているか、また、地図はどれほど「人間の特
定の世界の見方」¹²⁾であるか、を理解し始める。筆
者はこの戦略を追求することで、三つの議論の筋道
を發展させようと思う。第一に、言説的編成の中で
規則が果たす役割に関するフーコーの発想をいくつ
か取り上げ、その観点でカルトグラフィーに関する
言説を検討する。第二に、デリダの中心的立場の一
つに依拠して、地図のテキスト性、特にその修辭的
側面を検討する。第三に、フーコーへと戻り、地図
がいかにして社会において権力-知識power-knowledge
の形態として機能するかを考察する。

カルトグラフィーの規則

フーコーの主要な分析単位の一つは言説である。
言説は「知にとっての可能性の体系」¹³⁾と定義されて
きた。フーコーが採用した方法は、いわば次のよう
に問うことであった。

どんな規則がその言明を命じるのか、どんな規則
がわれわれに、ある言明を真とし、ある言明を偽
として見分けることを可能とするのか、どんな規則
が地図、模型、あるいは分類体系の構成を許す
のか、そして、言述〔言説〕の対象が修正ないし変
形されたとき、(…)どんな規則が暴露されるのか。
この種の規則群が確認されるときにはいつでも、
われわれは言述〔言説〕編成や言述〔言説〕の問題を
扱っている¹⁴⁾。

したがって、われわれにとっては、「どのような種

類の規則がカルトグラフィーの發展を統制してきた
か」が重要な問題となる。

カルトグラフィー、筆者はそれを、地図を独特な
視覚的表象の様式として構築するために地図作成者
が使用する理論的・実践的な知の体系、と定義する。
もちろんこの問題は歴史的に特有のものである。つ
まり、カルトグラフィーの規則は社会によってさま
ざまである。ここでは特に、17世紀以降の西洋のカル
トグラフィーの歴史を基礎づけて支配してきた二
つの言説的諸規則について言及する¹⁵⁾。一つは、地
図の技法的生産を統制するものとして定義されるだ
ろう。それは17世紀以降のカルトグラフィーに関す
る論文や書物で明示されたものである¹⁶⁾。もう一つ
は、地図の文化的生産に関わるものである。それは
科学的な手続きまたは技法のいずれよりも広い歴史
的文脈において理解されなければならない。さらに
いえば、それはカルトグラフィーが自らの言説の隠
れた側面を形成するために大抵の場合無視する規則
である。

それゆえ、カルトグラフィーの諸規則の一つ目は
科学的認識論の観点で定義されうる。少なくとも17
世紀以降、ヨーロッパの地図作成者と地図利用者は、
次第に、知識と認識に関する標準科学モデルを推進
するようになった。地図を作ることは、地勢の「正しい」
関係モデルを生み出すことである。それは以下の諸前提
にしたがう^{訳注3)}。

- 世界において地図化される物objectsは現実的かつ客観的である
- それらはカルトグラフィーから独立して存在する
- それらの実在は数学的用語で表現されうる
- 体系的な観察と測量が地図の真実へと向かう唯一の道筋を提供する
- その真実は独立に検証されうる¹⁷⁾

土地調査と地図構築の手続きは両方とも科学一般の
戦略と似た戦略を共有するようになった。カルトグ
ラフィーは、器具の使用と測量がより精密になった
こと、カルトグラフィーの知識の分類がますます複
雑になったこと、カルトグラフィーの表象のための
記号が増大したこと、規則の応用と普及を監視する
ために考案された諸制度および「専門的な」文献が特
に19世紀以降に増加したこと、そうしたことの歴史も
記録しているのである¹⁸⁾。さらに、カルトグ
ラフィーが地図作成の「芸術と科学」に対して世辞を
与え続けてきた一方で¹⁹⁾、すでに見たように、芸術

は地図から逸脱したものとみなされてきた。しばしばそれは、地図コミュニケーションにおいて、中心的役割ではなく表面的な取り繕いを与えられてきた²⁰⁾。視覚コミュニケーションを扱う哲学者——たとえばアルンハイム、エーコ、ゴンブリッチ、グッドマン²¹⁾——でさえも、地図を合同図形の一様なものとして——現実の類似物を創り出す相似、モデル、または「同等」として——分類し、本質的に芸術あるいは絵画とは異なるものとみなす傾向にあった。「科学的な」カルトグラフィー（と信じられたもの）が社会的要因によって傷つけられることはなかったのだろう。今日であっても多くのカルトグラファーは、政治学や社会学の理論は彼／彼女らの実践に光を投じることができだろう、という提案に困惑している。おそらくカルトグラファーは脱構築による指摘に身震いするだろう。

また、地図を（リチャード・ローティの言葉²²⁾を用いて）「自然の鏡」として受け入れることで、はっきりとは示されないかもしれないが、地図言説が有する他の特徴が多数もたらされる。最も印象的な特徴は進歩を信じることである。それは、科学を応用することでこれまで以上に正確な現実の表象を生み出せるというものである。カルトグラフィーという手法は、「真の、確からしい、進歩的な、またはしっかりと裏づけられた知識」²³⁾を提示してきた。この模倣の束縛〔現実を模倣することへの執着〕は、（軽蔑的な科学的排他主義によって）過去の地図を見下すことだけでなく、（地図作成の規則が異なる）他の非西洋または初期文化の地図をヨーロッパの地図よりも劣ったものとみなすことも促した²⁴⁾。同じように、科学的規則の主たる影響は、カルトグラファーが「真の」地図という自らの砦の周囲に壁を築くことを可能にする「標準」——「通常科学」²⁵⁾の成功版——を創り出すことであった。砦の中心には測量と標準化の要塞があり、壁を越えたところには不正確な画像、異端の画像、主観的な画像、価値付加的な画像、イデオロギーによって歪んだ画像の軍隊が待ち伏せる「非カルトグラフィー」の土地がある。カルトグラファーは〔標準に〕合致しない地図と関係する「他なるものの感覚」を発展させた。ジャーナリストが作成するような地図は、表現力expressivenessに関して〔科学的なカルトグラフィーとは〕異なる規則と様式が適用されると思われるが、それさえも多くのカルトグラファーによって「客観性」、「正確性」、「真実性」の標準にしたがって評価される。これに関連して、最近刊行された論集『メディアのカルトグラフィー *Cartographie dans les médias*』²⁶⁾では、多く

のカルトグラファーの根底にある態度が暴き出されている。書評者の一人は、〔その本において〕どれほど多くの著者たちが「単純な平面画像ではない図的表現をカルトグラフィーの領域」から追い払おうとし、「そのうえで他のすべての地図を、『カルトグラフィーの規則の屈曲』がもたらされる『地図に見立てた装飾図』として分類」しようとしているか、を示している。〔その本においては〕「(…)大半のジャーナリスティックな地図は、不正確で、誤解を招く、またはバイアスがかかっているため、欠陥品なのである」²⁷⁾。あるいはイギリスでは、1984年に「メディア・マップ・ウォッチ」なるものが設けられたようである。「関心のある数百人の〔地図学協会と地理学協会の〕構成員たちが、誤解を招くような基準に加え、多くの一般的な欠陥、誤差、不正確さをも〔規則にしたがって〕分析して明らかにするために、数千枚の地図と図を提出した」²⁸⁾。このカルトグラフィーの自警主義vigilantismの例では、いくつかのイデオロギー的な熱意によって「正確性の倫理」が守られている。「自然な」対立項の文字列が排除の言葉となっている。たとえば、「真と偽」、「客観と主観」、「字義的と象徴的」などである。「自明の事実性をもつ権威的なイメージ」を備えたものが最良の地図なのである²⁹⁾。

科学的規則が地図の中で見えなくなっている場合でも、われわれは、言説を正常化しようとする際の規則の働きをたどることができる。カルトグラファーの「ブラックボックス」は守られなければならないが、その社会的起源は隠されてきた。われわれは、ピーターズ図法が人気を得た時期に先導的なカルトグラファーたち間で生じたヒステリー³⁰⁾、あるいは敵を混乱させるために地形図を偽造したとロシアが認めた後に西ヨーロッパと北アメリカの地図作成者たち間で示された敬虔な態度に、どれほどこれらの規則に依拠してゲームがプレイされているか、を垣間見る。「ロシア人が地図作成を理解」(*Ottawa Citizen*紙)、「ソビエト人は地図の妄想症に侵されている」(*Wisconsin State Journal*紙)、あるいは(*New York Times*紙の)「西側諸国で地図作成者が『真実』を歓呼」、「ならず者たちがついに真実に気づき、それを語り始めた。国防総省の地理学者の報告」³¹⁾、といった1988年の新聞の見出しからわれわれは何を理解すべきか。それらが意味するのは、西側の地図は価値自由だということである。報道官によれば、われわれの地図はイデオロギー的な書類ではないし、ロシアの偽装に対する非難は、冷戦の修辞に対する反響と同じくらい信用できる、カルトグラフィーに

関する批判である。

この時宜にかなった例は二つ目の論点を提示する。すなわち、あらゆる場合において地図作成の科学的規則は地図の文化的生産を統制するまったく別の諸規則の影響を受ける、ということである。その規則を見つけるためには、技法的な手続きの行間、あるいは地図の地勢的内容の行間を読み取らなければならない。それは民族、政治、宗教、または社会階級といったものの価値と関係しており、地図を生産する社会全般に埋め込まれてもいる。地図言説は地図知の可能性が有するこの側面に向かって二重の沈黙を操る。地図それ自体の中では、社会構造はしばしば抽象的で道具的な空間の下に隠されるか、コンピュータ・マッピングの座標に幽閉される。また、カルトグラフィーが世界とその景観を作る、という言明を生み出す際には測量、編集、デザインと同じくらい社会構造が重要なのは事実であるにもかかわらず、カルトグラフィーの技法を扱う文献においても社会構造は無視されている。そのような社会的規則と技法的規則の相互作用はカルトグラフィーの知識の普遍的特徴である。その知識は地図の中で、その特徴の「秩序」および「その実践の階層」を生み出す³²⁾。フーコーの考えでは、それらの規則によってわれわれは、エピステーメーを確定すること、また時間をかけてその知の考古学をたどることが可能になる³³⁾。

地図表象を構築する際の規則の力を示すために、それが地図の中で表明される方法に関する二つの例を取り上げよう。一つ目は、周知のように、世界地図を作る際に「自民族中心主義規則」を順守することである。これによって昔の社会の多くが自らの領土を宇宙誌や世界地図の中心に置いた。普遍性を前提とするのは危険かもしれないし、例外はあるが、そのような規則は、古代バビロニア、ギリシャ、中国、あるいはイスラム世界かキリスト教ヨーロッパの中世の地図と同じくらい、コロンブスが到着する前の北アメリカのインディアンの宇宙図にはっきりと示されている³⁴⁾。しかしそれでも、フーコーによる知識批判をカルトグラフィーに適用する際に重要なことは、自民族中心主義規則の歴史は地図作成の「科学的な」歴史と歩調を合わせて進んでいるわけではない、ということである。それゆえ、ヨーロッパにおける科学ルネッサンスは、近代のカルトグラフィーに座標系、ユークリッド性、縮尺のある地図、正確な測量を与えた一方で、メルカトル図法のような投影法を通じてヨーロッパのイデオロギー的な中心性という新たな神話を強めることにも役立ったの

である³⁵⁾。あるいはまた、今の時代についていえば、第二次世界大戦以前にアメリカは、世界地図の上に自らの半分(「われわれの半球」)を置くことで排他性の伝統を強めた³⁶⁾。カルトグラフィーの歴史においては、一貫してイデオロギー的な「聖地」が頻繁に地図の中心に置かれる。そうした中心性、ある種の「潜在意識の幾何学subliminal geometry」³⁷⁾は、表象に地政学的な力と意味を与える。そのような世界地図は、別々の時期に別々の場所で広まった世界観を成文化し、正当化し、推進することを次々に手助けしていった、とも言える³⁸⁾。

二つ目の例は、どれほど「社会的秩序の規則」がカルトグラフィー的な転写transcriptionの小さなコードと空間に自らを挿入するように見えるか、である。17世紀以降のヨーロッパのカルトグラフィーの歴史はこの傾向に関する多くの事例を提供する。印刷された、または書き写された地図を引き出しから無作為に取り出してみよう。そこで浮かび上がるのは、そのテキストは間違いなく特定の国家または場所の地勢と同じくらい、それらの社会構造を解説する方法だということである。地図作成者はしばしば自然・人文景観の地勢と同じくらい、封建制度の輪郭、宗教の階層形態、社会階級の段階を精力的に記録する³⁹⁾。

この点で地図に説得力があるのは、社会の規則と測量の規則が同じ画像の中で互いに強化し合っているからである。ルイ・マランは、技師としてフランス王に仕えていたジャック・ゴンブストが1652年に作成したパリの地図について記した著作の中で、それを「この擬態-隠蔽という狡智にたけた戦略」と指摘している。

しかし、表象の知と科学は、その主体がずばりと公言している真实性を証明するために、実は社会的・政治的ヒエラルヒーの領域にこっそりと進入している。真实性の《テオーリアの》証拠を示す必要があったのだ。目印がその証拠なのであるが、作図面における配置において、目印のエコノミーが従っているのは、もはや幾何学的理性的次元の規則ではなく、社会的・宗教的伝統の次元の規範と価値なのである。境界と主だった住宅だけが自然的記号の恩恵、記号が表象するものと記号との間に保たれている視覚的関係の恩恵を享受している。一般市民・私人の住居は、まさにそれが公的なものでなく私的なもの、個人のものであるという理由で、恣意的・人為的な記号による一般的・共通的な表象を授かる権利しかない。つまり幾何学のみならず最も貧しくもっとも基本的な(だがそれゆえに

おそらくもっとも原理的な)要素——一律に大量再生産される点——でもって表されるのである⁴⁰⁾。

繰り返すと、この空間の階層化は、かなりの部分で「自民族中心主義規則」と同じように、地図表象の意識的な行為である。むしろ、王の居場所の方が下級の男爵の居場所よりも重要であるということ、城の方が小作農の住宅よりも重要であるということ、大司教の街の方が副司教のそれよりも重要であるということ、土地持ち紳士の地所の方が普通の農家のそれよりも重視する価値があるということは、社会の中では当たり前なのである。それに応じて、カルトグラフィーは体系的な社会的不平等を体现するために自らの語彙を展開する。地図記号という手法によって、地図の中で階級と権力の区別が操作され、具体化され、正当化される規則は「より強力で、より顕著で」あるように思われる。世界において力を持つ者の中には地図において力を持つ者も含まれるだろう。カルトグラフィーの交換トリック——記号の大きさ、線の太さ、レタリングの幅、陰影と濃淡、色の追加——をすべて取り上げることで、われわれは無数のヨーロッパの地図に見られるこのような補強の傾向の歴史を明らかにできる。われわれは、いかにして地図が芸術のように、「社会関係を定義したり、社会規範を維持したり、社会的価値を強めたりするための」⁴¹⁾メカニズムとなるか、を確認することから開始できる。

筆者が指摘したいのは、これら二つの例の場合、分類と測量の規律正しい構造の内と外の両方で規則が機能する、ということである。それは明言されたカルトグラフィーの目的を超えている。地図の権力の多くは、社会地理の表象として、一見中立な科学の仮面の背後で機能するものである。地図は自らの社会的側面を隠して否定すると同時にそれを正当化する。しかしそれでも、われわれがいかなる方法で地図を見ても社会の規則が表面化するだろう。その規則は、地図は少なくとも物の現象世界を測定したものと同じくらい社会的秩序の画像でもある、ということを保証してきたのである。

脱構築と地図テキスト

カルトグラフィーの規則——地図知をかたちづくる社会的文脈——に関する問題から本稿の中心的問題へと向かうには、地図テキストそれ自体に目を向ける必要がある。「テキスト」という語は意図的に選

ばれた。現在では、文学テキストだけでなく、それよりもっと幅広いものに対してテキストモデルを適用できるということが一般的に認められている。われわれは自信をもって、楽曲や建築構造といった本ではないテキストの中に、地図と呼ばれる図のテキストを加えることができる⁴²⁾。「テキストを構成するのは言語的要素の有無ではなく構築する動きである」ため、地図は「慣習的な記号体系を使用する構築物」としてテキストになる、といわれてきた⁴³⁾。バルトにしたがえば、テキストは「意味づけする意識を前提している」と言えるだろう。その意識を明らかにするのがわれわれの課題である⁴⁴⁾。確かに、地図の隠喩としては自然の鏡よりも「テキスト」の方が優れている。地図は文化的テキストである。そのテキスト性を認めることで多くの異なる解釈可能性を手に入れられる。われわれは明瞭さの透明性の代わりに不明瞭さの重要性を発見できる。事実には神話を加えることができるし、純粋さの代わりに欺瞞を期待する。われわれの関心は、コミュニケーションの形式科学、またはゆるやかに関係し合う一連の技法的工程によって研究することではなく、画像の歴史学や人類学へと向け直される。そしてわれわれは、地図表象の発話的性質⁴⁵⁾だけでなく、それが世界の同時代的な絵を提供する、という主張も認められるようになる。さらに、これらはすべて、地図の中立性を拒絶することにつながると思われる。なぜなら、[これらによって]われわれは、表象の文字どおりの顔よりも地図の意図を明確化するようになり、カルトグラフィーの実践の社会的結果を受け入れ始めるからである。筆者は、テキスト論的な問いを立てるという方向性によって、現在または過去の地図を読み取るための簡単な技法の数々が提示される、といっているのではない。地図の意味には決定不可能な側面がたくさんあると結論づけるべき場合もありうる、ということである⁴⁶⁾。

脱構築は、一般の言説分析として、カルトグラフィーまたはその歴史において一般的な実践となってきたもの以上に、地図テキストを詳しく、かつ深く読み取ることを求める。それはオルタナティブな意味の探索とみなせるだろう。

「ディコンストラクトする」こととは、意味、出来事、対象をより大きな運動や構造のうちに再刻印すること、再配置することである。それは、いわば絢爛たるつづれ織りを裏返すことである。それはそのまま、つづれ織りが世界に向けるいかにもぎらびやかな姿がいかなる糸によって織りなされてい

るのかをあらわにすることであり、裏面の決して美しいとはいえない糸のもつれをありのままに示すことでもある⁴⁷⁾。

刊行された地図にも「きらびやかな姿」があるし、われわれによる〔地図の〕読み解きは、幾何学的な正確性の評価、位置の確定、地形・地理パターンの認識を超えなければならない。こうした解釈は、地図テキストは標準的な客観性の表層を蝕む「隠されている様々な矛盾や欺瞞的な緊張」⁴⁸⁾を含むかもしれない、という前提から始まる。地図はつかみどころのない相手である。言語やイメージ一般に関するW. J. T. ミッセルの著作の言葉を借りれば、われわれは地図を「謎、説明されるべき問題、悟性を世界から隔離して監禁する牢獄」とみなす必要があるかもしれない。われわれは地図を、「不透明で、事実を歪曲する恣意的な表象の機構、イデオロギーによる神秘化の過程を隠蔽する、自然らしさと透明さを装った欺瞞的外観を呈する類の記号」⁴⁹⁾、とみなすべきである。たとえば、西洋近代のカルトグラフィーの歴史には一貫して、地図が装飾された場所、検閲されて秘匿にされた場所、自らの科学的性格の規則をひっそりと否定する場所に関する事例が数多く存在する⁵⁰⁾。

それらの実践のように、地図の脱構築は、多くの解釈者が地図に施した虚飾に焦点を当てるだろう。クリストファー・ノリスは「デリダの最も典型的な脱構築の動き」に関する著作で次のように述べている。

ディコンストラクションとは、テキストが修辞と論理の間の、はっきりと言おうとすることと言わされてしまうこととの間の緊張関係をそれと望まずにむき出しにしてしまう「アポリア」というのか、盲点、自己矛盾の瞬間を、注意深く捜し出すことだと言ってもいいだろう。従って、ある著作を「脱構築する」というのは、より正統的な考え方の解釈者たちがつねに、必然的に、見過してしまふ細部(なにげない隠喩、脚注、付随的な議論の展開)にこそ手をのばし、一種の戦略的な逆転をはかるということである。ディコンストラクションが安定を揺さぶる力の作動を発見するのは、まさしくここ、テキストの余白——つまり、強力な規範と合意とによって「余白/マージン」と規定される部分においてなのである⁵¹⁾。

17～18世紀のヨーロッパの地図に施された装飾芸術の内容を再解釈する近年の研究は——従来「何気

ない隠喩」や「脚注」とみなされてきたものからとりかかることで——古地図を脱構築する方法の好例を与えてくれる。カルトウシュと華やかなタイトルページのエンブレムは、取るに足らない注釈というよりも、それらの文化的意味を提示する方法の基礎とみなせるし⁵²⁾、カルトグラフィーは偏見のない図の科学を生み出すという主張をくつがえす。しかし、そのように見直すことの可能性は、歴史的な「装飾」地図に限定されない。ノースカロライナ州の公式州道地図に関するウッドとフェルスの最近の論稿⁵³⁾は、現代の地図の「余白」からとりかかることで、脱構築的戦略の幅広い応用可能性を示している。彼らは地図をテキストとしても扱っており、ロラン・バルトの記号論的体系としての神話という発想⁵⁴⁾に依拠しつつ、アプローチは構造主義的で結果は脱構築的な、カルトグラフィーに対する激しい社会的批判を展開している。彼らは意図的に地図の余白から、あるいはむしろ裏面に印刷された主題からとりかかる。

ノースカロライナ州の関心地点point of interests——数ある中でもとりわけ、角のある白オリックス、ビーズの装身用具を作るチェロキー族の女性、スキーリフト、砂浜の絵によって描き出されたもの——の目録が、フェリーのスケジュール、州知事からの歓迎メッセージ、自動車運転手の祈り（「我らが天父よ、今日、車の車輪を手取る我らに特別な祝福を与え賜え…」）の一側面を取り上げる。一方で、淡い黄色のサウスカロライナ州とヴァージニア州、ジョージア州とテネシー州の縁に囲まれ、淡い青色の大西洋に浸食されたノースカロライナ州は、白い下地の上に赤色、黒色、青色、緑色、黄色の道路の網細工として表現され、交差点が黒色の丸模様や桃色の斑点によって厚くなっている。（…）タイトルの左側には、はたため国旗が描かれている。右側には、飛行中のミツバチ（州虫）を上から覆うように捕らえるハナミズキ（州花）が咲く木の枝にショウジョウコウカンチョウ（州鳥）がとまっている様子が描かれている⁵⁵⁾。

これらのエンブレムは何を意味しているのか。単に旅行者を楽しませる飾りだろうか。あるいは、それらはわれわれにそのような州道地図の社会的生産について何か伝えることができるだろうか。脱構築者は、そのような意味は決定不可能であると述べるかもしれないが、ノースカロライナ州の州道地図がその純粹さと透明さの仮面の背後で他の対話的主張を作り出していることも明らかである。筆者

は、それらの要素が旅行者のA地点からB地点への移動を妨げるとは言わないが、地図の内部には第二のテキストがあると考えている。間テキスト的な *intertextual* ものを欠いている地図はないし、この場合においても、間テキスト性を発見することで画像を道路網の中立的な絵以上のものとして調べることが可能となる⁵⁶⁾。地図の「利用者」には一般の自動車運転手だけでなく、(数百万部配布された)その刊行物を宣伝装置として援用したノースカロライナ州も含まれる。その地図は州の政策と主権の道具となった⁵⁷⁾。同時に、その地図はノースカロライナ州による領土の支配権の宣言以上のものである。それは、州のエンブレムに対する忠誠心とキリスト教信仰の価値観によって、神話的な地理、すなわち「関心地点」に満ちた景観も構築する。それらをつなげる街の階層および道路を視覚的に支配するものが、世界の正当で自然な秩序となった。最終的に地図は、「道路はまさにノースカロライナ州のすべてである」⁵⁸⁾と断言する。地図はわれわれが自動車に夢中になっている様を偶像化する。神話には真実味がある。

こうした脱構築者の主張に対して「反則」と叫ぶことがカルトグラファーのありふれた反応だろう。それは次のように展開されると思われる。「まあ、それはしょせん州道地図なんですよ。すぐに普及して使えるようにデザインされているのでしょう。われわれはその地図に、道路網を誇張したり、運転手の関心地点を示したりすることを期待しています。州道地図は基本図ではなくて、それから派生した地図なんです」⁵⁹⁾。それは科学的な地図ではない。カルトグラファーが自らの技術を永続させる社会関係を否定しようとする際、究極の科学的な地図に訴えることが常に彼／彼女らの最終防衛線となっている。

デリダの戦略はその点において、科学的か非科学的か、基本的か派生的かにかかわらず、すべての地図へとそのような解釈を広げるのに役立つ。デリダは、あくまで哲学の脱構築としてではあるが、「字義通りになるテキストの位相が実は極めて隠喩的なものに他ならないこと」⁶⁰⁾を示せた。したがってわれわれも、地図の「事実」がどれほど象徴でもあるかを示すことができる。「何の装飾も施されていない」科学的な地図の中では科学自体が隠喩となる。そのような地図は「象徴的実在論 *symbolic realism*」の側面を含む。それは、昔の装飾地図の上部に掲げられた女王の紋章や肖像に劣らず、政治的な権威と統制の言明である。隠喩は変化してきた。地図は曖昧さと別の可能性から自らを切り離そうと試みてきた⁶¹⁾。

かつてはデザインの正確さと厳格さが権威性の新たなお守りであったのだが、それはいまのコンピュータ・マッピングの時代へと続いている。われわれはヨーロッパの啓蒙主義的な地図作成の歴史におけるこのプロセスをかなりはっきりと跡づけることができる。地図の中で示される地勢は次第に詳細かつ平面的に正確になり、功利主義的な哲学と権力に対するその意志の隠喩となった。カルトグラフィーはこの文化的モデルを紙の上に刻み、われわれはそれを多くの縮尺と種類の地図の中で検討できる。道具と技法の精度は、神話の外殻をまとい、世界の選択的な見方として、単にイメージを強化することに役立つ。それゆえ、旧体制下のヨーロッパにおける地方の住宅の地図は、計測器による調査に由来するが、土地の性格にもとづく社会構造の隠喩であった。国と地域の地図は、科学的な測量にもとづいていたが、ローカルな価値と権利の分節化であった。ヨーロッパ諸国の地図は子午線の弧に沿って作られたが、それでもなお複雑に組み合わさったナショナリストの発想の象徴的な簡略表現として役立つ。また、世界地図は数学的に定義される投影法にもとづいて描かれるようになっていったが、それにもかかわらず、ヨーロッパ諸国による海外征服と植民地化という明白なる使命 *manifest destiny* にらせん状のひねりを与えた⁶²⁾。これらの各事例において、われわれは科学的な地図の隠喩の輪郭をたどれる。続いてこれは、いかにしてテキストは社会的現実に影響を与える道具として働くか、ということに関するわれわれの理解を増進する。

脱構築の理論では修辞の働きが隠喩の働きと密接に結びついている。筆者は本章の結論として、「科学的な」カルトグラフィーは文化を自然へと変換し、社会的現実を「自然化」しようとしているが⁶³⁾、それでもそれは本質的に修辞的言説であり続ける、と主張する。デリダの哲学批判のもう一つの教訓は、「従来主として文学テキストに適用されてきたけれども、それは実は哲学をも含むいかなる類いの言説を読むのにも欠くことができない」⁶⁴⁾、ということである。カルトグラフィーは説得的なコミュニケーションの芸術である、という考えには何の革新性もない。いまや、古典的な文彩の意味で人文科学の修辞について論じるのはありきたりである⁶⁵⁾。カルトグラファーでさえも——彼／彼女たちによる批判も同じように——修辞的なカルトグラフィーという考えをほのめかすようになってきたが、いまだに地図の修辞性を詳細に読み解く姿勢が欠けている⁶⁶⁾。論点は、一部の地図が修辞的であるかどうか、あるいは

は他の地図が部分的に修辭的であるかどうか、といったことではなく、修辭はどれほどすべての地図テキストの普遍的な側面か、である。それゆえ、一部のカルトグラファーにとって「修辭」は依然として輕蔑的な用語のままだろう。それは地図の科学的な内容では裏づけられない「無意味な美辭麗句empty rhetoric」である。「修辭」はプロパガンダ・マッピングや広告のためのカルトグラフィーといった〔一般的にカルトグラフィーと思われているものを〕「超えたものexcessive」、もしくは、それを地図の科学の核心に対置される「芸術的」または審美的要素に縛りつける試み、を指すために使われる。修辭はすべてのテキストの機能の仕方の一部であり、すべての地図は修辭的テキストである、ということ認めるのが筆者の立場である。繰り返すと、われわれは、地図の中で見つかる「プロパガンダ」と「真実」、また「芸術的な」様式の表象と「科学的な」様式の表象、という両義的な二元論を解体しなければならない。すべての地図は観衆の文脈において自らのメッセージを枠づけようと努力する。すべての地図は世界に関する議論を示すし、元から命題的propositionalである。すべての地図は、(特に「科学的な」地図では⁶⁷⁾)権限の発動や、色、装飾、活版印刷術、献呈の辞の利用、または手法の正統性の記述を通じた潜在的読者層へのアピール⁶⁸⁾、のような修辭の共有装置を採用する。修辭は隠されるかもしれないが、パフォーマンスのない記述は存在しないのだから、それは常に現前する。

地図作成の諸段階——選択、省略、単純化、分類、階層化、「記号化」——は、すべて元から修辭的である。それらは、地図を利用する際と同じくらい地図で意図を示す際に、いくつかの「カルトグラフィー上の一般化の基本法則」⁶⁹⁾の機能をやり取りするのではなく、人間の主観的な目的を表すのである。実際、カルトグラフィーにおける修辭的戦略の自由さは相当なものである。地図作成者は目下の言説の目的外にある世界の要素をただ除外するだけである。異なる主張の目的に対応し、異なる修辭的目標をめざし、カルトグラフィーの健全な実践と思われるものに関する異なる前提を具体化し、歴史的に発展してきた地図、その種類には限界がない。地図のスタイルは過去にも現在にも固定されない。「修辭的コードはそれが伝播しようとする神話に最も有利なスタイルで地図に適用される」⁷⁰⁾、と言われてきた。修辭的地図vs非修辭的地図という観点で考えるよりも、すべての種類の地図テキストにおけるこの根本的な側面に順応するカルトグラフィーの修辭の理

論、という観点で考えた方が有益である。それゆえ筆者は、科学に対する修辭の優位性には関心がない。むしろ、地図の内容だけでなく社会的目的も読み取りつつ、それらの錯覚的な区別を解体することに関心を寄せている。

地図と権力の行使

議論の最終段階へと向かうためにフーコーに戻ろう。そうすることで、デリダに対するフーコーの批判を心に留めておく。デリダは、「解釈を純粋に統辭シニタクスとテキストの水準に限定」⁷¹⁾しようとしたのだが、その世界にはもはや政治的現実が存在しない。一方でフーコーは、「テキストそのものが反映し、またそれを利用してもしいるところの、種々の社会的実践」を暴いたり、「それ〔書き言葉エクリチュール〕を生み出した技術的、物質的な枠組みを再構築」したりしようとした⁷²⁾。脱構築は認識論的思潮を変化させることや、カルトグラフィーの修辭的読解を促すことに役立つが、筆者が最終的に関心を寄せるのは、カルトグラフィーの社会的・政治的側面や、社会において地図が権力—知の形態として働く方法を理解することである。これにより、文脈依存的なかたちをとるカルトグラフィーの歴史に向けて、議論を締めくくる。

われわれはすでに、どうすればカルトグラフィーを言説——われわれが地図や地図帳として定義する画像に埋め込まれた知識の表象のための一連の規則をもたらず体系——とみなせるか、を確認した。「近代秩序の権力の知という母型」⁷³⁾の中に、地図——とりわけ国家によって生み出されて操作されたもの——にとって適した場所を見つけるのは難しいことではない。特に、地図が政府の指揮下にある場所(あるいはそのような地図に由来する場所)では、法令、領土的威厳、そして政治的権力を行使することで生じる価値、それらを地図が拡張し補強する方法を確認できる。しかし、権力が社会において地図言説とその力の影響を通じて機能する方法を理解するためには、さらなる解体が必要である。支配や転覆という単純なモデルは不適切である。筆者は、カルトグラフィーにおける外的権力と内的権力の区別を描き出すことを提起する。これは、究極的にはフーコーの権力—知という発想に由来するが、この特定の定式化はジョセフ・ラウズの近著*Knowledge and Power*⁷⁴⁾に依拠している。そこでは、同じように、フーコーにもとづく科学の内的権力の理論が示されている。

カルトグラフィーにおいて最も馴染みのある権力観は、それが地図や地図化にとって外的だということである。これは地図を政治的権力の中心に結びつける働きをする。権力はカルトグラフィーに対して行使される。大半のカルトグラファーの背後にはパトロンがいる。数え切れないほど多くの場合において、地図テキストの作者は外的なニーズに応じてきた。また、権力はカルトグラフィーを用いて行使される。君主、聖職者、国家機関、教会はすべて、自らの目的のためにマッピング・プログラムに着手した。近代西洋社会において地図は、すぐさま国家権力を——その境界、その商業、その内政、その人口統制、その強兵に向けて——維持するための重要な存在となった。地図作成はすぐに国家の仕事となった。カルトグラフィーは早い時期に国有化されている。国家はカルトグラフィーの知識を慎重に保護する。地図は例外なく検閲され、秘密にされ、改ざんされてきた。これらすべての場合において地図は、フーコーが「管轄権力(judicial power)⁷⁵⁾と呼んだものと結びついている。地図は「管轄区域」となる。それは監視と統制を促すのである。地図は依然として無数の方法でわれわれの生活を統制するために利用される。われわれは地図を当たり前ものと思っているかもしれないが、いまや地図のない社会は政治的に想像不可能だろう。これらはすべて地図の助けを利用した権力である。それは外的権力であり、しばしば中央に集められ、官僚的に利用され、上から押しつけられ、計画的な政策の特定の法令または局面において表明される。

筆者は今、重要な区別にたどり着いた。社会における地図の影響の中心を占めるものには、カルトグラフィーにとって内的な権力として定義されるものもあるだろう。それゆえ問題は、管轄的な権力体系におけるカルトグラフィーの場所から、地図を作る際に作者が行うことの政治的影響へと移る。カルトグラファーは権力を製造する。彼／彼女らは空間的な一望監視装置panopticonを作り出すのである。それは地図テキストに埋め込まれた権力である。われわれはすでに言葉の権力について、または変化の力としての明文規定について語っているが、それと同じように地図の権力について語るができる。この意味で地図は政治的である⁷⁶⁾。権力は知識と交わる、また知識に埋め込まれている。それは普遍的である。フーコーは次のように述べる。

権力の遍在だが、しかしそれは権力が己が無敵の統一性の下にすべてを再統合するという特権を有するからではなく、権力があらゆる瞬間に、あらゆる地点で、というかむしろ、一つの点から他の点への関係のあるところならどこでも発生するからである。権力は至る所にある。すべてを統轄するからではない、至る所から生じるからである⁷⁷⁾。

権力は地図からやって来る、また地図の作成方法を横断する。それゆえこの内的権力にとって鍵となるのは地図作成の工程である。それは、地図を編集する方法や、選択された情報の分類、すなわち、地図を一般化する方法、景観を抽象化するための一連の規則、景観の要素を階層化する方法、権力を再生産するさまざまな修辭的スタイルによって景観を表象するために利用される方法、を意味する。世界をカタログにすることは世界を占有することであるため⁷⁸⁾、これらすべての技法的工程はカルトグラフィーの正式な用途を超え、世界のイメージを操作する行為を表している。世界は規律化される。世界は標準化される。われわれはその空間行列に囚われている。カルトグラフィーにとっては、他の形式の知識と同じくらい、「すべての社会的行為は分類図式によって決定された境界を通じて流動する」⁷⁹⁾。カルトグラファーの仕事場において何かが起きるということと、フーコー⁸⁰⁾が記した規律的施設——監獄、学校、軍隊、工場——において人々に何かが生じるということは類似している。いずれの場合も標準化の工程が生じる。あるいは同じように、工場において工業製品を標準化するかの如く、われわれは自らのカルトグラフィーの仕事場において自らの世界イメージを標準化している。われわれが研究室において物理的世界のプロセスに関する定型的理解を作り出すかの如く、地図において自然は図的定式へと還元される⁸¹⁾。一般にカルトグラファーの権力は、個人に対してではなく、一般の人々が利用できるようにされた世界の知識に対して行使される。しかし、それは意識的には行われぬし、「意図される」、「意図されない」という単純な分類を超えている。筆者は、権力が故意に、または集中的に行使されることを示唆しているのではない。権力は局所的な知識であり、それは同時に普遍的でもある。権力は通常気づかれずに通り過ぎる。地図は権力の静かなる仲裁者である。

マール・マクルーハンの言葉(「印刷の論理」)⁸²⁾を適用するならば、人間の意識に対する「地図の論理」の影響は何だろうか。彼と同じように筆者は、

われわれは地図について、精神構造の形成および世界の場所感覚の伝達における抽象化、均一性、再現性、視覚性の影響を考慮しなければならない、と考えている。そうした場所感覚、また、世界とは何か、もしくは世界とはどのようなものでありうるか、に関する多くの異なる見方の区別が、社会におけるカルトグラフィーの影響について疑問を投げかける。それゆえセオドア・ローザックは次のように述べる。

カルトグラファーは自分たちの地図については語るが景観については語らない。なぜなら、彼／彼女らがよく口にする事柄は、普通の言葉に翻訳されるとかなり矛盾したものになるからである。彼／彼女らが地図と景観の違いを忘れると——また、われわれにその違いを忘れることを許可する、または納得させると——ありとあらゆる種類の責務が生じる⁸³⁾。

それらの「責務」の一つは、地図は、大量生産されてステレオタイプ化されたイメージの中で世界を分節化することで、埋め込まれた社会的な見方を表現する、ということである。たとえば、普通の道路地図帳はアメリカで最もよく売れている文庫本の一つであるという事実⁸⁴⁾を踏まえて、そのことが普通のアメリカ人の自国認識にどのような影響を与えたかを考えてみよう。それらの地図帳はどのような種類のアメリカイメージを喚起するだろうか。一方には非常に単純な風格がある。州間高速道路を出ると、何の冒険にも誘わない必要最小限の一般的な世界に風景が溶け込む。文脈は剥ぎ取られ、場所はもはや重要ではない。他方では、地図はあらゆるステレオタイプの両義性を明らかにする。それらの沈黙はページの上にも書き込まれている。そのような匿名化された地図のページ上のどこに多様な自然があるのか、どこに風景の歴史があるのか、どこに人間が経験する時空間があるのか⁸⁵⁾。

今まさに、疑問が生じた。そのような空^{から}のイメージは、われわれが世界について考える方法に影響を与えるのだろうか？ 世界のすべてが同じようにデザインされているということは、社会的影響を気にせず、それにしがって行動する方が楽ではないか？ そのような疑問を投げかけるとき、デリダとフーコーの戦略はぶつかり合うように思われる。デリダによれば、もし意味なるものは決定不可能だとすれば、それは、象徴的行動の言説としての地図が備える力の大きさと同等のものとなさなければならない。最後に筆者は、われわれの世界を構成する大き

な闘いに徹底的に絡みついているすべての知識——つまりカルトグラフィーも含まれる——を確認するにあたり、フーコーに依拠しようと思う⁸⁶⁾。地図は、権力関係を変化させるそれらの闘いにとって、外的なものではない。地図利用の歴史は、それがそうである〔地図が闘いにとって外的ではない〕かもしれないことや、地図が特定のかたちの権力と権威を具体化していることを示唆する。ルネッサンス以降、地図は権力の行使の仕方を変えてきた。たとえばヨーロッパ人にとって、植民地化された北アメリカにおいて、インディアン^の政治的アイデンティティの現実を感じることなく、彼／彼女らの国家の領土をまたいで線を引くのは容易いことであった⁸⁷⁾。地図はヨーロッパ人が「これは私のものであり、これは境界線である」⁸⁸⁾と述べることを可能にした。同様に、16世紀以降に生じた数え切れないほど多くの戦争においては、戦場での虐殺を感知することよりも、色つきのピンと仕切りを使って戦闘を実施することの方が、将軍にとって容易であった⁸⁹⁾。あるいはまた、われわれの社会では依然として、「進歩」の社会的混乱を測定することなく独特な場所の体系を操作するのは、官僚、開発者、「計画者」にとって容易なことである。地図は決して現実ではないが、そのような仕方で異なる現実を創造するのを助ける。地図上の線は刊行されたテキストに一度埋め込まれると、削除するのが難しいと思われる権威を獲得する。地図は権威主義的なイメージである。われわれがそれを意識しなければ、地図は現状を補強し正当化することができる。変革の主体は時折同じように保守的な文書になることができる。しかしいずれの場合においても、地図は決して中立ではない。地図が中立であるように思われるところでわれわれを説得しようとしているのは、愚かな「中立の修辞」⁹⁰⁾である。

結論

地図を脱構築するという解釈行為は、カルトグラフィーの歴史を幅広く探求するうえで三つの機能を果たすことができる。第一に、それは、客観的な科学は常に現実のより良い描写を生み出し累積的に進歩する、という（カルトグラファーたちによって創られた）認識論的な神話に対してわれわれが異議を唱えることを可能にする。第二に、脱構築者の議論は、われわれが地図の歴史的重要性を再定義することを可能にする。それは地図の研究を無効にするのではなく、われわれの世界に秩序を築く方法、とい

う地図表象の権力に関するわれわれの理解に、異なるニュアンスを加えることによって強化される。間テクスト性を受け入れることができるならば、われわれはオルタナティブで時折論争的な言説に向けて、地図の読み取りに着手できる。第三に、考え方を脱構築的に転回することで、テキストと知識に関する学際的研究の中に地図の歴史を扱う場所をよりたくさん確保できるになるだろう。フーコーの意味での言説のような知的戦略、科学的言説に本来備わっているものとしての隠喩や修辞というデリダの考え、そして広まる権力—知概念、それらが多くの主体によって共有されている。それらも地図の見方として豊かである。それらは解釈学的な探究に反するわけでも、その鋭さの点で反歴史的だというわけでもない。われわれは解体することで構築するのである。地図の中にある意味を見つけることや、カルトグラフィーの変化の社会的なメカニズムをたどることの可能性が広がられている。ポストモダニズムは、他のテキストの読解と相互に豊かにし合うような仕方で、地図を読むことへの異議申し立てを提起する。

謝辞

1989年1月にノースウェスタン大学シカゴキャンパスで開かれた「場所の力The Power of Places」会議において、また1989年3月にウィスコンシン大学ミルウォーキー校地理学部でブラウンバック・レクチャーとして、これらの議論の初期段階のものを発表した。それらの場で意見してくださった方々、並びに、有益なコメントをくださったソナ・アンドリュース、キャサリン・デラノ・スミス、コーデル・イーに感謝の意を表します。加えて、資料収集にあたってはアメリカ地理学協会コレクションのハワード・デラーに、論文投稿を準備する際の編集にあたってはエレン・ハンロンに、それぞれお世話になりました。

注

- 1) Markham, B., *West with the night*. New York: North Point Press, 1983. [マークカム, B. 著, 野中邦子訳『夜とともに西へ』角川書店, 1999年, 293-294頁]
- 2) これらの区別については(1) Eagleton, T., *Literary theory: an introduction*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1983. [イーグルトン, T. 著, 大橋洋一訳『文学とは何か——現代批評理論への招待』岩波書店, 1985年]を参照されたい。カルトグラフィーの直接の関心に近い説明については(2) Ferraris, M., 'Postmodernism and the deconstruction of modernism', *Design Issues* 4-1 and 2, Special Issue, 1988: 12-24. を参照されたい。
- 3) *Cartographic Perspectives: Bulletin of the North American Cartographic Information Society* 1-1, 1989: 4. で報告された。
- 4) 他にも同じような指摘をした者がいる。特に Wood, D. and Fels, J., 'Designs on signs/myth and meaning in maps', *Cartographica* 23-3, 1986: 54-103. による痛烈な脱構築的転回を参照されたい。
- 5) (1) Marin, L., 'Portrait of the king', in *Theory and history of literature* 57, trans. Houle, M. M., Minneapolis: University of Minnesota Press, 1988: 169-179. [マラン, L. 著, 渡辺香根訳『王の肖像——権力と表象の歴史哲学的考察』法政大学出版局, 2002年, 288-304頁] また (2) Boelhower, W., *Through a glass darkly: ethnic semiosis in American literature*, Venezia: Edizioni Helvetia, 1984: 41-53. および (3) Boelhower, W., 'Inventing America: A Model of Cartographic Semiosis', *Word and Image* 4-2, 1988: 475-497. も参照されたい。
- 6) ジャック・デリダの著作に由来する。詳しい説明は、(1) Derrida, J., *Of Grammatology*, trans. Spivak, G. C., Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1976. [デリダ, J. 著, 足立和浩訳『根源の彼方に——グラマトロジーについて上・下』現代新潮社, 1972年] の訳者序文 (pp. ix-lxxxvii) [ガヤトリ・C. スピヴァク著, 田尻芳樹訳『デリダ論——『グラマトロジーについて』英語版序文』平凡社, 2005年] (2) Norris, C., *Deconstruction: theory and practice*. London: Methuen, 1982. [ノリス, C. 著, 荒木正純・富山太佳夫訳『ディコンストラクション』勁草書房, 1985年] (3) Norris, C., *Derrida*. Mass: Harvard University Press, 1987. [ノリス, C. 著, 富山太佳夫・篠崎実訳『デリダ——もうひとつの西洋哲学史』岩波書店, 1995年]を参照されたい。
- 7) たとえば建築学とプランニングについては(1) Knox, P. L. ed. *The design professions and the built environment*, London: Croom Helm, 1988. (2) Gregory, D., 'Postmodernism and the politics of social theory', *Environment and Planning D: Society and Space* 5-3, 1987: 245-248. を、地理学については(3) Michael Dear, 'The postmodern challenge: reconstructing human geography', *Transactions of the Institute of British Geographers*, 13-3, 1988: 262-274. を参照されたい。
- 8) 前掲5) (1), p. 173. [邦訳294頁]。本稿の後半で引用箇所の全文を示す。
- 9) 導入としては、(1) Edward W. Said, "The Problem of textuality: two exemplary positions," *Critical Inquiry* 4-4, Summer 1978: 673-714が特に有益であると思われる。また、(2) Hoy, D., 'Jacques Derrida' (Skinner, Q. ed., *The return of grand theory in the human sciences*, Cambridge: Cambridge University Press, 1985), pp. 41-64. [ホイ, D. 著, 足立和浩訳「ジャック・デリダ」, 加藤尚武・三島憲一・足立和浩・中村雄二郎・野家啓一・川本隆史・藤澤賢一郎・今村仁司・宮坂敬造・樺山紘一訳『グラントセオリーの復権——現代の人間科学』産業図書, 1988年, 69-111頁] および (3) Philp, M., 'Michel Foucault' (ibid.), pp. 65-82. [中村雄二郎訳「ミシェル・フーコー」, 同上, 113-141頁] も参考にな

- る。
- 10) 一方で筆者は、デリダによるいくつかのより極端な立場には与しない。たとえばカルトグラフィーの社会史にとっては、テキストの外側には何もないnothing lies outside the text、という見方を採用するのは受け入れ難いことだろう。
- 11) Korzybski, A., *Science and sanity: an introduction to non-Aristotelian systems and general semantics 3rd ed.* Connecticut: The International Non-Aristotelian Library Pub. Co., 1948: 58, 247, 498, 750-751.
- 12) Blocker, G. H., *Philosophy and art*, New York: Charles Scribner's Sons, 1979: 43.
- 13) 前掲9(2), p. 69. [邦訳119頁]
- 14) *ibid.*
- 15) 「西洋のカルトグラフィー」は、初めにヨーロッパの啓蒙主義において完全に姿を現し、次にヨーロッパの海外進出の一部として世界の他地域へと広がった測量図作成 survey mapping の類として定義される。
- 16) これらの技法的規則の歴史はカルトグラフィーの歴史において広く書き記されてきたが、それは社会的な意味合いの観点で書かれたものでも、フーコーの言説の意味で書かれたものでもなかった。たとえばCrone, R. G., *Maps and their makers: an introduction to the history of cartography, 1st ed.*, 1953, 5th ed. Folkestone, Kent: Dawson; Hamden, Conn.: Archon Books, 1978. の後半の章を参照されたい。
- 17) 科学一般に関するこれらの特徴の議論については、(1) Campbell, P. N., 'Poetic-rhetorical, philosophical, and scientific discourse', *Philosophy and Rhetoric* 6-1, 1973. 訳注4 および(2) Woolgar, S., *Science: the very idea*. Chichester, Sussex: Ellis Horwood, 1988. の特に第1章を参照されたい。また、より歴史的文脈に特化したものについては(3) Hooykaas, R. 'The rise of modern science: when and why?' *The British Journal for the History of Science* 20-4, 1987, pp. 453-473. を参照されたい。
- 18) 根拠については、(1) Wolter, J. A., 'The emerging discipline of cartography', Ph.D. Diss., University of Minnesota, 1975. および(2) Wolter, J. A., 'Cartography, an emerging discipline,' *The Canadian Cartographer*, 12-2, 1975, pp. 210-216. を参照されたい。
- 19) たとえば、(1) Meynen, E. ed., *Multilingual dictionary of technical terms in cartography*, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1973, p. 1, 3. における国際地図学協会のカルトグラフィーの定義を参照されたい。あるいは、より最近の(2) Wallis, H. M. and Robinson, A. H. eds., *Cartographical innovations: an international handbook of mapping terms to 1900*, Tring, Herts: Map Collector Publications and International Cartographic Association, 1987, p. xi. では、カルトグラフィーは「科学的資料と芸術作品としての地図の研究を含む」とされている。
- 20) Morris, J., 'The magic of maps: the art of cartography', M.A. Diss., University of Hawaii, 1982. における議論を参照されたい。
- 21) (1) Arnheim, R., 'The perception of maps' (*New essays on the psychology of art*, Berkeley: University of California Press, 1986), pp. 194-202. [アルンハイム, R. 著, 関計夫訳『芸術心理学』「地図の知覚」地湧社, 1987年, 192-195頁] (2) Eco, E., *Theory of semiotics*, Bloomington: Indiana University Press, 1976, pp. 245-257. [エーコ, U. 著, 池上嘉彦訳『記号論II』1980年, 166-184頁] (3) Gombrich, E. H., 'Mirror of map: theories of pictorial representation', *Philosophical Transactions of the Royal Society of London Series B, Biological Sciences*, 270-903, 1975, pp. 119-149. (4) Goodman, N., *Languages of art: an approach to a theory of symbols*. Indianapolis and New York: Bobbs-Merrill, 1968, pp. 170-171, 228-230. [グッドマン, N. 著, 戸澤義夫・松永伸司訳『芸術の言語』慶應義塾大学出版会, 2017年, 234-244頁]
- 22) Rorty, R., *Philosophy and the mirror of nature*, Princeton: Princeton University Press, 1979. [ローティ, R. 著, 野家啓一監訳『哲学と自然の鏡』産業図書, 1993年]
- 23) Laudan, L., *Progress and its problems: toward a theory of scientific growth*, Berkeley: University of California Press, 1977, p. 2.
- 24) 古地図の歴史記述におけるこれらの傾向の議論については、Harley, J. B., 'L'Histoire de la cartographie comme discours', *Préfaces*, 5 December 1987-January 1988, pp. 70-75. を参照されたい。
- 25) (1) Kuhn, T. S., *The structure of scientific revolutions*, Chicago: The University of Chicago Press, 1962. [クーン, T. S. 著, 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房, 1971年] において盛んに議論された意味である。それに関する異論と議論については、(2) Lakatos, I. and Musgrave, A. eds., *Criticism and the growth of knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press, 1970. [ラカトシュ, L., マスグレーヴ, A. 著, 森博監訳『批判と知識の成長』木鐸社, 1985年] を参照されたい。
- 26) Gauthier, M. ed., *Cartographie dans les médias*, Québec: Presses de l'Université du Québec, 1988.
- 27) Andrew, K. S., 'Review of Cartography in the Media', *The American Cartographer*, 16, 1989, pp. 219-220.
- 28) Balchin, W. G. V., 'The media map watch in the United Kingdom' (前掲26), pp. 33-48.
- 29) Lupton, E., 'Reading isotype', *Design Issues* 3-2, 1986, pp. 47-58. で使われている言葉(p. 53で引用されている)。
- 30) (1) Peters, A., *The new cartography*, New York: Friendship Press, 1983. 応答としては(2) Loxton, J., 'The Peters phenomenon', *The Cartographic Journal* 22-2, 1983, pp. 106-108. (3) Robinson, A.H., 'Arno Peters and his new cartography', *American Cartographer* 12, 1985, 103-111. (4) Porter, P. and Voxland, P. 'Distortion in maps: the Peters' projection and other devilmits', *Focus* 36, 1986, pp. 22-30. が挙げられる。よりバランスの取れた見方としては(5) Snyder, P. J., 'Social consciousness and world maps', *The Christian Century*, February 24th, 1988, pp. 190-192. がある。
- 31) (1) 'Soviet aide admits maps were faked for 50 years' and

- 'In West, map makers hail 'truth'', *The New York Times* September 3, 1988. (2) 'Soviets admit map paranoia', *Wisconsin State Journal* Saturday, September 3, 1988. (3) 'Soviets caught mapping!' *The Ottawa Citizen Saturday*, September 3, 1988. (4) 'Faked Russian maps gave the Germans fits', *The New York Times* September 11, 1988. (5) 'National geo-glasnost?' *The Christian Science Monitor* September 12, 1988.
- 32) Foucault, M., *The order of things: an archaeology of the human sciences*. A Translation of *Les mots et les choses*. New York: Vintage Book, 1973, p. xx. [フーコー, M. 著, 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物——人文科学の考古学』新潮社, 1974年, 19頁]
- 33) 前掲32), p. xxii. [邦訳20-21頁]
- 34) 多くの解説者がこの傾向を記している。たとえば(1) Tuan, Y-F. *Topophilia: a study of environment perception, attitudes, and values*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, 1974, Chapter 4, "Ethnocentrism, symmetry, and space", pp. 30-44. [トゥアン, Y-F. 著, 小野有五訳『トポフィリア——人間と環境』, 第4章「自民族中心主義・対称性・空間」, 筑摩書房, 2008年, 62-84頁]を参照。これとの関連で古代・中世のヨーロッパの地図については, (2) Harley, J. B. and Woodward, D. eds., *The History of cartography vol. 1: cartography in prehistoric, ancient, and medieval Europe and the Mediterranean*. Chicago: The University of Chicago Press, 1987. を参照。イスラムと中国の地図については, (3) Harley, J. B. and Woodward, D. eds., *The History of Cartography vol. 2: cartography in the traditional Islamic and Asian societies*. Chicago: The University of Chicago Press, forthcoming. [1995年刊行。刊行時の副題はCartography in the traditional East and Southeast Asian societies]を参照。
- 35) 前掲30)(1)の各所。
- 36) この「規則」のより広範な歴史については, (1) Whitaker, A. P., *The Western hemisphere idea: its rise and decline*. Ithaca, New York: Cornell University Press, 1954. および(2) Boggs, S. W., 'The Map as an "Idea": the role of cartographic imagery during the Second World War', *The American Cartographer* 2-1, 1975, pp. 19-53. を参照されたい。
- 37) Harley, J. B., 'Maps, knowledge, and power', in *The Iconography of Landscape*, ed. Cosgrove, D. and Daniels, S. Cambridge University Press, 1988, pp. 277-312. (引用箇所はpp. 289-90) [ハーリー, J. B. 著, 山田志乃布訳「地図と知識、そして権力」, コスグロブ, D.・ダニエルズ, S. 編著, 千田稔・内田忠賢監訳『風景の図像学』, 地人書房, 2001年, 395-441頁 (引用箇所は412-413頁)]
- 38) われわれの世界観の主要な源泉としての実際のマッピングと思考様式*mentalité*との結びつきは、今でも徹底的に検討されるべきである。いくつかの現代的な結びつきについては, (1) Ehrenberg, R. E., *Scholars' guide to Washington, D.C. for cartography and remote sensing imagery*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press, 1987. のまえがきと, (2) Henrikson, A. K., 'Frameworks for the world', pp. viii-xiii. を参照されたい。世界各地の個人の認知地図におけるこの結びつきの影響を測定しようとする研究の報告については, (3) Saarinen, T. F., *Centering of mental maps of the world*. Discussion Paper Series 87-7. Department of Geography and Regional Development, Tucson, Arizona, 1987. を参照されたい。
- 39) 一般的な議論については, (1) 前掲37), pp. 292-94. [邦訳415-418頁]を参照。拙稿(2) Harley, J. B., 'Power and legitimization in the English geographical atlases of the eighteenth century', in *Images of the world: The atlas through history*, ed. Wolter, A. J., Washington, D.C.: Library of Congress, forthcoming. [1996年刊行]では、過去の社会の地図について「社会的秩序の規則」が議論されている。
- 40) 前掲5)(1), p. 173. [邦訳294頁]
- 41) Geertz, C., 'Arts as a cultural system', in *Local knowledge: further essays in interpretive anthropology*, New York: Basic Books, 1983, p. 99. [ギアツ, C. 著, 梶原景昭・小泉潤二・山下晋司・山下淑美訳『ローカル・ノレッジ——解釈人類学論集』岩波書店, 1991年, 「文化システムとしての芸術」171頁]
- 42) これについては, (1) MacKenzie, D. F., *Bibliography and the sociology of texts*. London: The British Library, 1986. の特に34-39頁で説得力のある主張が示されている。そこでマッケンジーは地図のテキスト性を議論している。(2) Robinson, A. H. and Petchenik, B. B., *The nature of maps: essays toward understanding maps and mapping*. Chicago: University of Chicago Press, 1976, p. 76. は、地図を言葉とする隠喩を退けている。彼らは、「二つの体系、地図と言葉は本質的に相いれない」と述べ、おなじみの前提、すなわち言葉は言語的であり、画像は語彙を持たず、文法は存在せず、構文の時系列は欠けている、という文字通りの意味に自分たちの信念を据えつける。
- 43) 前掲42)(1), p. 35.
- 44) Barthes, R., *Mythologies: selected and translated from the French by Annette Lavers*. New York: Hill and Wang, 1972, p. 110. [バルト, R. 著, 篠沢秀夫訳『神話作用』現代思潮社, 1967年, 141頁]
- 45) Wood, D., 'Pleasure in the idea: the atlas as narrative form', in *Atlases for schools: design principles and curriculum perspectives*, ed. Carswell, R. J. B., de Leeuw, G. J. A. and Waters, N. M. *Cartographica* 24-1, 1987, pp. 24-45 [Monograph 36] は、カルトグラフィーの物語的特性を紹介した。
- 46) テクストの意味の決定不能性は、デリダの哲学批判において中心的な位置を占める。前掲9)(2), pp. 54-58. [邦訳92-100頁]による議論を参照されたい。
- 47) (1) Soja, E. W., *Postmodern geographies*. London: Verso, 1989, p. 12. [ソジャ, E. W. 著, 加藤政洋・水内俊雄・大城直樹・西部均・長尾謙吉訳『ポストモダン地理学——批判的社会理論における空間の位相』青土社, 2003年, 98頁]による(2) Eagleton, T., *Against the grain*. London: Verso, 1986, p. 80. [イーグルトン, T. 著, 大橋洋一・鈴木聡・黒瀬恭子・道家英穂・岩崎徹訳『批評の政治学——マルクス主義とポストモダン』平凡社, 1986年, 143頁]の引用。

- 48) 前掲9) (2), p. 54. [邦訳92頁]
- 49) Mitchell, W. J. T., *Iconology: image, text, ideology*. Chicago: The University of Chicago Press, 1986, p. 8. [ミッチェル, W. J. T. 著, 鈴木聡・藤巻明訳『イコノロジー——イメージ・テキスト・イデオロギー』勁草書房, 1992年, 10頁]
- 50) Harley, J. B., 'Silences and secrecy: the hidden agenda of cartography in early modern Europe', *Imago Mundi* 40, 1988, pp. 57-76.
- 51) 前掲6) (3), p. 19. [邦訳10-11頁]
- 52) より最近では、(1) Clarke, C. N. G., 'Taking possession: the cartouche as cultural text in eighteenth century American maps', *Word and Image* 4-2, 1988, pp. 455-474. がある。また、(2) 前掲37) pp. 296-299. [邦訳422-424頁] (3) Harley, J. B., 'Meaning and ambiguity in Tudor cartography', in *English map-making, 1500-1650: historical essays*, ed. Tyacke, S. London: The British Library Reference Division Publications, 1984, pp. 22-45. また(4) 前掲39) (2)もある。
- 53) 前掲4)。
- 54) 前掲44) 'Myth today', pp. 109-59. [邦訳「今日における神話」137-211頁]
- 55) 前掲4), p. 54.
- 56) すべての言説の間テキスト性については、Todorov, T., Mikhail Bakhtin: *the dialogical principle*, trans. Godzich, W. Minneapolis: University of Texas Press, 1981. [トドロフ, T. 著, 大谷尚文訳『ミハイル・バフチン 対話の原理——付バフチン・サークルの著作』法政大学出版局, 2001年] を参照——カルトグラフィーを分析するための指針を備えている。また、Bakhtin, M. M., *The dialogic imagination: four essays*, ed. trans. Holquist, M. Caryl Emerson and Michael Holquist. Austin: University of Texas Press, 1981. も参照。これらの文献については、ウィスコンシン大学マディソン校でHistory of Cartography Projectに関わっているコーデル・イー博士の助言にもとづいている。
- 57) 前掲4), p. 63.
- 58) 前掲4), p. 60.
- 59) 「基本」と「派生」の区別は、「一般的な目的」と「主題」の区別と同じように、しばしばカルトグラファーが依拠する自明の区別の一つである。しかし脱構築は、意図、神話、沈黙、権力などの力の働きを明らかにすることで、ある地図はしばしば別の地図に複写される、またはそれに由来する、という非常に実践的な意味を除く解釈的な目的のために、そのような区別を分解する傾向にある。
- 60) 前掲9) (2), p. 44. [邦訳74頁]
- 61) この考えは、ロラン・バルトの発想について述べた前掲2) (1), p. 135. [邦訳210頁]にもとづいている。
- 62) これらの例は、前掲37) , p. 300. [邦訳425頁] から引用した。
- 63) 前掲2), pp. 135-136. [邦訳210-211頁]
- 64) 前掲6) (3), p. 19. [邦訳32頁]
- 65) たとえば、(1) McCloskey, D. N. *The rhetoric of economics*. Madison: The University of Wisconsin Press, 1985. [マクロースキー, D. N. 著, 長尾史郎訳『レトリカル・エコノミクス——経済学のポストモダン』ハーベスト社, 1992年] および(2) Nelson, J. S., Megill, A. and McCloskey, D. N. eds., *The rhetoric of the human sciences: language and argument in scholarship and public affairs*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1987. を参照されたい。
- 66) 注目すべき例外については、(1) 前掲4) を参照されたい。(2) Goffart, W., 'The map of the barbarian invasions: a preliminary report', *Nottingham Medieval Studies* 32, 1988, pp. 49-64. は、過去の地図帳における地図の修辞に関する興味深い例を記している。
- 67) 前掲4) , pp. 99では、信頼性図reliability diagrams、複数の基準格子、磁気誤差図magnetic error diagramを備える地形図の例が示されている。主題図については、「Fスケールの記号の装飾と心理測定的に分割された灰色」が同じような形式の修辭的説明である。
- 68) 前掲5) (1), pp. 169-174. [邦訳288-298頁] で議論されたように、ゴンブストのバリの地図に組み込まれた「文面」は好例を提供する [ゴンブストが作成したバリの地図の右端には読者に向けた文面が、左端には国王に宛てた文面がそれぞれ書かれている]。
- 69) 一部の教科書ではいまだにこれが信じられている。たとえば、Robinson, A. H., Sale, R. D., Morrison, J. L. and Muehrcke, P. H., *Elements of cartography 5th ed.* New York: John Wiley & Sons, 1984, p. 127. を参照されたい。
- 70) 前掲4), p. 71.
- 71) (1) 前掲9) (2), p. 60. [邦訳102頁] その先の議論については(2) 前掲6) (3), pp. 213-220. [邦訳206-216頁] を参照されたい。
- 72) 前掲9) (2), p. 60. [邦訳102頁]
- 73) 前掲9) (3), p. 76. [邦訳130頁]
- 74) Rouse, J., *Knowledge and power: towards a political philosophy of science*. Ithaca: Cornell University Press, 1987.
- 75) (1) Foucault, M., *Power/knowledge: selected interviews and other writings, 1972-1977*, ed. Gordon, C. trans. Gordon, C., Marshall, L., Mepham, J. and Sopher, K. New York: Pantheon Books, 1980, p. 88. および(2) 前掲74) pp. 213-226. も参照されたい。
- 76) これはWinner, L., 'Do artifacts have politics?', *Daedalus* 109-1, 1980, 121-136. の考えにもとづいている。
- 77) Foucault, M., *The history of sexuality vol. 1: an introduction*, trans. Hurley, R. New York: Random House, 1978, p. 93. [フーコー, M. 著, 渡辺守章訳『性の歴史 I —— 知への意志』新潮社, 1986年, 120頁]
- 78) フーコーと同じように、「カタログを作ることは、一見すると単に確認することのように思われるが、占有することでもある」と記している(1) Barthes, R., 'The plates of the encyclopedia', in *New Critical Essays*. New York: Hill and Wang, 1980, p. 27. を加えておこう。(2) 前掲4), p. 72. はその文を引用している。
- 79) Darnton, R., *The great cat massacre and other episodes in French cultural history*. New York: Basic Books, 1984, pp. 192-193.

- 80) 前掲74), pp. 213-26.
- 81) 実際、カルトグラファーは、自らが行うことに関するこの隠喩を推進したがる。たとえば、Monmonier, M. and Schnell, G. A., *Map appreciation*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall, 1988, p. 15. を読まれない。「地理学はカルトグラフィー的な一般化を生きがいにする。地図は地球を縮める能力とそれについて一般化する能力を持つ。それゆえ地理学者にとっての地図は微生物学者にとっての顕微鏡である。(…)微生物学者は適切な客観的レンズを選ばなければならない、地理学者は問題となっている現象、および地理学者がそれを研究している『地域実験室 regional laboratory』の両方にとって、適切な地図の縮尺を選択しなければならない。」
- 82) McLuhan, M., *The Gutenberg galaxy: the making of typographic man*. Toronto: University of Toronto Press, 1962. [マクルーハン, M. 著, 森 常治訳『グーテンベルグの銀河系——活字人間の形成』みすず書房, 1986年]の各所。
- 83) Roszak, T., *Where the Wasteland ends: politics and transcendence in postindustrial society*. New York: Doubleday, 1972, 410. この主張においてローザックは、地図を科学的手法のための隠喩として利用しており、地図が世界を表象する方法が世の中で広く認知されていることを繰り返し指摘している。
- 84) McNally, A., 'You can't get there from here, with today's approach to geography', *The Professional Geographer* 39, November, 1987, pp. 389-392.
- 85) この批判はロラン・バルトのエッセイ(1) 前掲44) 'The Blue Guide', pp. 74-77. [邦訳「ギド・ブルーの旅行案内」87-91頁]を思い起こさせる。そこで彼はGuide〔旅行案内書『ギド・ブルー』〕を、「地理を記念碑的なそして無住の世界に還元する」ものとして記している(われわれはそれを「道路」に置き換える)。より一般的には、この傾向は(2) Szegö, J., *Human cartography: mapping the world of man*, trans. Miller, T. Stockholm: Swedish Council for Building Research, 1987. の関心でもある。(3) 前掲83) も参照されたい。その408頁で彼は次のように述べている。「地図は景観そのもの、あるいは景観を包括的に描写したようなものではない、ということをおぼろげに、われわれは地図のすべての価値を失う。[それを]忘れてしまうと、われわれはコンピュータプログラムにしたがうロボットのように厳格なものとなる。われわれは、すべての徒歩旅行者が保持しなければならない知的柔軟性と直感的判断を失う。そしてわれわれは、地図を細かく知っているかもしれないが、われわれの知識は純粋に学術的で、非経験的で、浅薄である。」
- 86) Rabinow, P., *The Foucault reader*, New York: Pantheon Books, 1984, pp. 6-7. を参照。
- 87) Harley, J. B., 'Victims of a map: New England cartography and the native Americans', Paper read at the Land of Norumbega Conference, Portland, Maine, December, 1988.
- 88) 前掲5) (2), p. 47. による Wahl, F., 'Le désir d'espace', in *Cartes et figures de la terre*, Paris: Centre Georges Pompidou, 1980, p. 41. の引用。
- 89) ベトナムと関連する最近の例については、Muehrcke, P. C., *Map use: reading, analysis, and interpretation*, 2nd ed. Madison: J.P. Publications, 1986, p. 394. を参照されたい。ただしここでは、そのような軍事的な例は、地図を用いた行為の普通の側面ではなく「悪用」として分類されている。著者は、「地図は世界を映し出す」[という考えを]自らの中心的な隠喩として保ち続けている。
- 90) Kinross, R., 'The rhetoric of neutrality', *Design Issues*, 2-2, 1985, pp. 18-30. が示した列車時刻表の例には、地図に対する示唆的な類似性がある。

※訳者付記：注は読みやすさを考慮し、形式的な面で修正を加えた。

訳注

訳注1 “cartography”は、地図作成法(地図作成の専門的な技法)と、それを扱う学問である地図学の二つの意味をもつが、本稿の場合明確に区別されていないので、両方の意味を込めて「カルトグラフィー」と訳した。“cartographer”も同様に「カルトグラファー」と訳した。

訳注2 “image”は文脈から判断して、紙などに描かれたものを意味すると考えられる場合は「画像」、想像や心象を意味すると考えられる場合は「イメージ」と訳した。

訳注3 原文はセミコロンで区切っているが、読みやすさを考慮して簡条書きにした。

訳注4 原文では“Scientific discourse”というタイトルになっているが、誤りであるため訂正した。

訳者解題

情報通信技術の発達に伴い、地理空間情報のデジタル化、オープン化、クラウド化、ユビキタス化が進展している。いまや、専門家に限らない多くの人々がさまざまな目的のために地図を作成・利用している。また、われわれは、知らぬ間に自らのパーソナルな事柄をデータ化され、位置情報と結びつけられ、どこかの誰かによって地図上に落とし込まれている。良くも悪くも、地図はわれわれの生活にとって身近で当然のものとなってきている。筆者はこれを「テクノロジーの進歩とその影響」としてではなく、「地図—社会関係の密接化」として捉えたい。今の時代、地図を社会から切り離されたものとみなすのはほとんど不可能である。

地理学とその隣接分野では、多様な立場の研究者

によって地図と社会の関係が議論されてきた。アプローチの仕方は科学的なものから哲学的なものまでさまざまであるが、特に社会理論をベースにするものは「批判地図学critical cartography」と呼ばれている。端的に言えば、批判地図学とは、地図そのものや地図に関わるさまざまな物事を支えている暗黙の前提を社会的観点(政治的・倫理的なものも含む)で捉え直す取り組みである(学問分野ではなく、地図に対する批判的なアプローチ)。なお、ここでの「批判」は否定や粗探しなどではなく、物事を根本から捉え直すことを意味する。批判地図学の概要はジェレミー・クランプトンが著した教科書*Mapping: A Critical introduction to Cartography and GIS*(Crampton, 2010)や、クリス・パーキンスによる解説(Perkins, 2018)を参照されたい。

“Deconstructing the map”(以下、「脱構築論文」と表記)は、批判地図学の嚆矢とされる論文である。筆者がこの30年も前の論文を訳そうと思った理由は二つある。一つは、地図と社会の関係に関心のある日本の研究者に対して批判地図学の端緒を知る機会を提供したいと考えたからである。もう一つは、脱構築論文をすでに読んだことがある人に対して当該論文を改めて「批判的に」読み返す機会を提供したいと考えたからである。

以下では、それらの理由に触れつつ、批判地図学の歴史における脱構築論文の位置づけについて考えたいと思う。脱構築論文の内容についてはすでに伊藤(2006)が詳細に説明しているのだから、そちらを参照されたい。伊藤(2006)は原文を忠実になぞっているが、ここではむしろ脱構築論文が抱える問題点に焦点を当てる。そうすることで、その後の批判地図学研究の中でハーリー流のアプローチがどのようなものとして理解されているのかを示す。

1. ハーリーの略歴

最初に、マシュー・エドニーの“The origins and development of J. B. Harley’s cartographic theories”(Edney, 2005)をもとに、脱構築論文の著者であるブライアン・ハーリーについて紹介しておきたい。

ハーリーは地図史を専門とする歴史地理学者である。バーミンガム大学で地理学の博士号を取得した後、リバプール大学で地理学の助教授と講師(1959～1969年)を、エクセター大学(1970～1986年)で地理学の講師をそれぞれ務めた。その間に彼は、英国陸地測量部が作成する地図Ordnance Survey Mapに関する著作(Harley, 1976)を発表している。

もともとハーリーは地図史の分野において経験

的な研究に取り組んでいたが、マイケル・ブレイクモアと共に“Concepts in the history of cartography: A review and perspective”(Blackmore and Harley, 1980)を執筆したあたりから従来の進歩主義的な地図史観に疑問を抱き始め、社会理論をベースとする哲学的な研究を行うようになった。Edney(2005)によれば、ハーリーは同書の執筆を通じて、カルトグラフィーを社会(また地図学に限らない広範な学問)の中に位置づける必要があると考え始めたようである。同書が刊行された翌年にはデヴィッド・ウッドワードと共に「カルトグラフィーの歴史プロジェクトThe History of Cartography Project」を立ち上げ、カルトグラフィーの歴史を批判的に見直す研究に着手している。さらに、1985年にバーミンガム大学で文学の博士号を取得すると、その翌年にはアメリカに拠点を移し、ウィスコンシン大学ミルウォーキー校で地理学の教授を務めながら上記プロジェクトに取り組むようになった。そして、1987年、今なお続く*The History of Cartography*シリーズの第1巻を発表した。

上記プロジェクトを進める中でハーリーは、当時流行していたポストモダニズムやポスト構造主義について学び、それをもとにカルトグラフィーに認識論的転換をもたらすことを目指した。彼は*The History of Cartography*第1巻を刊行後、批判的な地図論を次々に発表し、地図の社会性や、地図学者／地図作成者の倫理観に迫ったのだが、1991年に59歳の若さにして鬼籍に入った。それから10年後、彼が発表した批判地図学論文のうち、特に重要なものが*The New Nature of Maps: Essays in the History of Cartography*としてまとめられた(Harley, 2001)。脱構築論文もその中に含まれている。

ちなみに、*The Dictionary of Human Geography*の第5版(Gregory, et al., 2009)の中でハーリーは、「カルトグラフィーcartography」、「カルトグラフィーの歴史cartography, history of」、「探検exploration」、「歴史地理学historical geography」、「図像学iconography」、「地図map」、「読図map reading」、「テキストtext」、「視覚と視覚性vision and visibility」の9項目で登場する。また、そこで引用されている文献9編中8編が上述の“Concepts in the history of cartography”以降に発表された批判地図学関連のものである。地理学分野においてハーリーという人物は、長谷川(1993: 40)がいうように「ポスト・モダンの地図史研究の旗手」として位置づけられているのかもしれない。

2. 日本におけるハーリーの受容

ハーリーの批判地図学は、日本においてもさまざま

まなかたちで紹介されてきた。たとえば、1990年に当時の国際地図学協会会長D.R.F.テイラーは日本で講演を行い、その前年に発表された脱構築論文を紹介している。その際、彼は次のように述べた。

すべてのカルトグラファーがハーリーの主張に賛同するわけではないだろうし、多くの者はその主張は言い過ぎで不愉快だと思うかもしれないが、彼が提起した問いは、出現しつつある情報化時代においてカルトグラファーが所を得る闘争として、慎重に考察する価値のある重要なものである (Taylor, 1990: 2)。

地図史研究の動向を整理した長谷川(1993)は、1991～1992年にハーリーと矢守一彦が相次いで亡くなったことは「斯学にとって大きな痛手であり、一時期が画された感が強い」(p. 157)と述べ、脱構築論文の前年に発表された“Silences and secrecy: The hidden agenda of cartography in early modern Europe” (Harley, 1988a)の内容を紹介している。また、伊藤(2006)は脱構築論文の内容を詳しく紹介し、ハーリーの地図観について検討している。加えて上杉(2009: 204-205)は、人文地理学の教科書の中でハーリーを「近年の地図分析に大きな影響を与えた人物」として紹介し、日本の古地図を例に彼のアプローチを説明している。

一方で小川(1992)は、当時の地図研究を①地図学史的アプローチ、②行動(認知)科学的アプローチ、③社会言語学的アプローチに分類し、③の例としてハーリーの批判地図学を挙げている。また、ハーリーがフーコーの学説を取り入れ、「イデオロギー装置の一部として独自の政治的内容を含んだ西欧の近代地図にスポットを当てている」ことを踏まえて、彼のアプローチを「ソシオ・カルトロジー」と呼んでいる(p. 588)。

比較的最近では鈴木(2012, 2013)が*The History of Cartography*を批判地図学の先駆として紹介している。鈴木は、「学問としての可能性を拓げるためには、批判地図学は定量的な分析にも堪えるものでなければならない」(2013: 91)とし、ハーリー流のアプローチをGISによって発展させようと試みている。また、鈴木(2012)はそうしたGISを用いた批判地図学を「役に立つ地理学」として位置づけ、ハーリー流のアプローチの社会的有用性を論じている。

この他にも、1990年代初頭のGIS論争についてまとめた池口(2002)は、論争の背後にハーリーの批判地図学があったことを示唆している。同様に若林・

西村(2010)は、GIS論争後の批判GISを方向づけた*Ground Truth: The Social Implications of Geographic Information Systems* (Pickles, 1995)が、もともと著者のジョン・ピクルスとハーリーの対談に端を発するものであったことを指摘している。

訳書を通じてハーリーのことを知る人もいるだろう。たとえば、ロン・J. ジョンストンの『現代地理学の潮流——戦後の米・英人文地理学説史』(原題*Geography and Geographers: Anglo-American Human Geography Since 1945*)では、第8章「文化的方向」第4節「言語・テキスト・ディスクール」の中で、一定の紙幅を割いてハーリーの論稿(脱構築論文など)が紹介されている(ジョンストン, 1999: 188-191)。歴史地理学の概説書『近現代の空間を読み解く』(原題*Key Concepts in Historical Geography*)では、「歴史地理学的知の生産における視覚資料の利用」(モリッシー, 2017: 205)をまとめた第23章「視覚化された地理」(原題“*Illustrative geographies*”)において批判地図学が取り上げられ、その「祖」としてハーリーが紹介されている。そこでは、彼の研究は、「実証主義を批判し、言説や権力そして知に関心を向ける芸術・人文・社会科学のより広範な議論に地図を持ち込むことで、地図学の分野に大転換をもたらした」(p. 206)、と評されている。

地理学以外の分野においてもハーリーの批判地図学が知られている。たとえば、英文学者の勝山貴之による『英国地図製作とシェイクスピア演劇』(勝山, 2014)は、*The New Nature of Map*がベースとなっている。勝山は、「本研究は、ハーリー氏による地図研究に触発され着手したものであり、ハーリー氏の研究がなければ本研究は生まれなかった」(p. 29)と述べている。高田(2013)は歴史学の立場から第二次世界大戦時のアメリカと地図・地球儀の関係を論じたものであるが、そこでは先述した長谷川(1993)を介してハーリーが紹介されている。また、歴史学者ジェレミー・ブラックの『地図の政治学』(原題*Maps and Politics*)でも、ハーリーなどによる批判地図学が紹介されている(ブラック, 2001: 9-36)。

このように、日本においてもハーリーの取り組みを知る機会はいくつもあるのだが、これまで彼の論稿のうち日本語で読めるものは、1988年に『風景の図像学』(原題*The Iconography of Landscape*)の中で発表された「地図と知識、そして権力」(原題“*Maps, knowledge, and power*”)のみであった(Harley, 1988b)。そのためか、日本ではハーリーに言及する際、その論稿に注目が集まりやすい(たとえば、上述の高田(2013))。

しかし、地図・地理関連分野への影響力という点で考えれば、脱構築論文が最も重要であることは間違いない。伊藤 (2006: 37) は、「Brian Harleyの *Deconstructing the map* ほど、その後の地図研究に影響を与えた論文はないであろう」と述べる。Perkins (2018: 81) は脱構築論文を「批判地図学の基礎的なテキストの一つ」とする。Perkins (2018: 81) によれば、脱構築論文の被引用数は、それが掲載された *Cartographica* 誌で史上二番目の多さだという。2015年には同誌上で脱構築論文の発表25周年を記念する特集“*Deconstructing the map: 25 years on*”が組まれた (*Cartographica*, vol.50 No.1)。また、脱構築論文は複数の書籍に再録されている (Agnew et al. 1996; Taylor and Winquist 1998; Dear and Flusty 2002; Dodge 2011; Dodge, et al. 2009)。

さらに、「地理的可視化 *geovisualization*」の提唱者である地図学者アラン・マクエイカーンは、*How Maps Work: Representation, Visualization, and Design* の第1章“*Taking a scientific approach to improving map representation and design*”において、“*Deconstructing the discipline*”という節を設け、脱構築論文を中心に当時の批判地図学研究 (ハーリー以外の研究者によるものも含む) を紹介している。マクエイカーンはそこで次のように述べている。

カルトグラフィーに関するポストモダンの説明は、確かに活発な議論を生み (…)、カルトグラファーが作り出す生産物の社会的含意を彼／彼女らに再認識させたのだが、それは、いかにしてわれわれは記号化やデザインの戦略を選択すべきか、ということに関するあらゆる根本的な疑問に対する答えを提示しない——また、その意図からして提示することができない。それが提示するのは、地図によって表象される環境中の個人、集団、社会に対してそれらの選択判断がどのように影響を与えるか、を説明する方法である (MacEachren, 1995: 10-11)。

後述するようにハーリーは地図の修辞性を問題化したのだが、地理的可視化はそれに対する科学的地図学者からの回答として位置づけることもできるだろう (Crampton, 2001)。筆者が脱構築論文を訳そうと思った理由の一つ目は、以上のような当該論文の影響力に由来する。

3. 脱構築論文の概要

では、ハーリーは脱構築論文を通じて何をしよう

としたのか。次の二つの文に論文の目的がはっきりと示されている (以下、脱構築論文を引用する際は原文の頁番号のみを記す)。

本稿における筆者の基本的な主張は、われわれはカルトグラフィーの性質を解釈する方法に認識論的転換を促すべきだということである (p. 1)。

筆者は特に、地図的思考を支配し、啓蒙主義時代以降それを「通常科学」の道へと導き、カルトグラフィーの歴史に既成かつ「当然」の認識論を与えてきた、現実と表象の間に仮定されたつながりを壊すために、脱構築者の戦略を利用する。本稿の目的は、カルトグラフィーの歴史にとっては科学的な実証主義ではなく社会理論にもとづくオルタナティブな認識論の方が適切だと提案することである (p. 2)。

要するに、科学的観点ではなく社会的観点に立ち、従来とは異なる地図観を提示する、ということである。ハーリーが考える従来の地図観とは、地図は現実を映し出すものである (地図は「自然の鏡」である)、という考え方である。ハーリーはこうした地図観を、ポストモダニズムやポスト構造主義、特にフーコーとデリダの考えに依拠して「脱構築」しようと試みた。それは次のように展開される。

まずフーコーの言説概念に依拠しつつ、近代以降のカルトグラフィーが科学的規則と文化的規則という二種類の規則によって言語的に構築されていることが示される (章題「カルトグラフィーの規則」)。カルトグラファーは中立で価値自由な科学的技法を追求するが、実のところそれは社会構造に規定された文化的産物である。カルトグラフィーは、非科学的で不正確なものから科学的で正確なものへと単線的に発展するのではなく、場所・時代ごとに社会的に構築されるのである。

次にデリダに依拠しつつ、地図をテキストとみなしたうえで、そうした規則にもとづいて作られる地図の中では科学的修辞が「仮面」として機能し、社会構造がその下で「沈黙」している、ということが示される (章題「脱構築と地図テキスト」)。地図の描画内容は社会構造に左右されているにもかかわらず、それは科学的技法が有する「中立」や「価値自由」の修辞によって、表面上見えなくされている。科学的に作られた地図が見せる「現実」の世界は創られた「神話」であり、世界そのものではない。世界の真の姿を知るには、地図に描かれたものではなく描かれていな

いもの(地図の「行間」または「余白」)を読まないといけないのである。

最後にフーコーの権力-知概念に依拠しつつ、規則と修辞にもとづく地図の権力性が示される(章題「地図と権力の行使」)。地図というテキストは修辞によって利用者に特定の知識(この場合は科学的な世界の見方)を与え、それとは異なる知識(科学的でない世界の見方)を抑え込んでしまう。従来の地図研究は、国家などが地図をコントロールする権力(地図に対して行使される権力=地図の外的権力)に注目することはあっても、地図によって人々の知識に影響を及ぼす権力(地図によって行使される権力=地図の内的権力)は看過されていた。われわれはこの内的権力について考える必要がある。

以上が脱構築論文の概要である。今にすれば、このような発想に目新しさはない。たとえばデジタルマッピングやビッグデータ分析などの専門家である地理学者ミンシアン・ツォウは次のように述べる。

いわゆる「客観的視覚的評価」という点でカルトグラフィーについて批判するのは意味がない。なぜなら、カルトグラファーたちはすでにカルトグラフィーが芸術、科学、技法の組み合わせであることを認めているからである。カルトグラファーは皆、カルトグラフィーの芸術的スキルが科学的で技法的な知識と同じくらい重要であることに賛同している(Tsou, 2019: 175)。

しかし当時は、「[地理学では] 地図の重要性が強調される一方で、地図そのものについての考察が非常にすくないことはおどろくべきことである」(小林, 1978: 18)とか、「Cartographyは(…) 地図製作法であって、『地図そのもの』を論じない」(堀, 1990: 165)などと言われていた時代であるため、脱構築論文は「カルトグラフィーの性質を解釈する方法に認識論的転換を促す」という点では一定のインパクトを持っていたと考えられる。実際、脱構築論文が発表されるとすぐに複数のカルトグラファーが反応を示し、*Cartographica*誌の次の号(vol. 26, No. 3-4)で、上述のテイラーのような賛否両論のコメントを載せている。ハーリーは脱構築論文の中で、「今日であっても多くのカルトグラファーは、政治学や社会学の理論は彼/彼女らの実践に光を投じることができるだろう、という提案に困惑している。おそらくカルトグラファーは脱構築による指摘に身震いするだろう」(p. 4)、と述べている。「身震い」とまではいかずとも、脱構築論文は当時のカルトグラファーたち

を「困惑」させたように思われる。

4. 脱構築論文を「批判的に」読む

ところで、上述のようにハーリーはフーコーとデリダに依拠して彼なりの批判地図学を行ったのだが、それは、両者の考えから直接導き出されたものではない。言い換えれば、ハーリーが行ったような批判地図学をフーコーとデリダの思想から直接導き出すのは不可能である。バーバラ・ベリアは次のように述べる。

カルトグラフィーの歴史を研究する者の理解を広げるために、ハーリーは「科学的な実証主義ではなく社会理論に根差すオルタナティブな認識論」を求めた。この目的を追求するにあたり彼は、「フーコーとデリダの著作」に対して恩義を抱いていることを明言する。[しかし]ハーリーが依拠したい「社会理論」を与えてくれるのはデリダでもフーコーでもない。ハーリーの晩年の諸論稿は、カルトグラフィーにとっての記号と指示対象との関係についてのフランスの著述家の根本的なradical再考を適用することとはほど遠く、従来からあるような、地図による地球物理学的特性の表象=再現前representationに社会政治的側面を付け加えたにすぎない(Belyea, 1992: 7)。

これは一体どういうことか。実は脱構築論文が抱えるこの奇妙さが、その後の批判地図学の展開にとって重要なのである。そして、筆者が脱構築論文を訳そうと思ったもう一つの理由はこの点にある。

まず脱構築論文の注10に注目したい。ハーリーはそこで、デリダに全面的に依拠するわけではないことを示している。

一方で筆者はデリダによるいくつかのより極端な立場には与しない。たとえば、テキストの外側には何もない、という考えをカルトグラフィーの社会史に適用するのは受け入れ難いことだろう(p. 10)。

ハーリーは1992年に論文集*Writing Worlds*で脱構築論文の改稿を発表している。彼はそこで上記の文を本文中に移し、次のように書き換えている。

筆者は、テキストの外側には何もない、というデリダの見方を受け入れない——それはカルトグラフィーの社会史という発想を明らかに挫折させる——が、一方で、すべてのテキストは修辞的だという彼の考えは刺激的な挑戦を提供してくれる

(Harley, 1992: 233)。

おそらくハーリーはデリダの発言を、「テキストだけ見よ」、という意味で解釈したと思われる。ハーリーは、地図というテキストの「内側」はその「外側」にあたるコンテキスト(文脈)に規定されると考えている。そして彼にとってそのコンテキストにあたるのが社会である。そのため、テキストだけ見ることを勧めるような考えは「カルトグラフィーの社会史を明らかに挫折させる」のである。

しかし、ハーリーはデリダの発言の要点を見過ごしている。確かにその発言には「テキストだけ見よ」という意味があるが、それだけではない。ハーリーが問題にしている部分はデリダの*De la grammatologie*で登場する「il n'y a pas de hors-texte」というフレーズであるが、Sparke (1995: 4) は、同書を英訳したガヤトリ・C. スビヴァクがそのフレーズを「テキスト外なるものは存在しないthere is no outside text」と訳していることを強調する。これは、テキストに内／外という区別は存在しない、ということである。

ハーリーの考えでは、地図(テキスト)は社会(コンテキスト)によって規定されているため、地図を理解するには社会を参照する必要がある。しかし、その際に参照される「社会」とは何なのだろうか。ハーリーは世界や社会の実在reality(現実世界、現実社会)を疑わない。彼にとって世界はあらかじめ存在=現前しpresent、社会もその中にあり、地図はその社会に生きる人間の解釈によって作られた世界の表象=再現前representationである。しかし、デリダが上記の発言で示しているのは、テキストを理解する際にわれわれは所与の社会ではなく表象(解釈の産物)としての「社会」なるものを参照している、ということである。デリダにとってみれば地図も社会もテキストであり、それらを取り巻く世界はテキスト(書き言葉、記号)の無限の連なりである。デレク・グレゴリーも*Geographical Imaginations*の中でこれについて指摘している。

「地図の外側には何も無い」というフレーズが純粋なテキスト中心主義textualismを認め、「カルトグラフィーの社会史を挫折させる」ことを心配している重要な一点において、ハーリーはデリダを間違っ

て解釈している、ということの意味している(Gregory, 1994: 74)。

この「間違っただけ」はハーリーの次の発言からも明らかである。

デリダは、「解釈を純粋に^{シタツクス}統辞とテキストの水準に限定」しようとしたのだが、その世界にはもはや政治的現実が存在しない(p. 12)。

ハーリーは脱構築論文を通じて「現実と表象の間に仮定されたつながりを壊す」(p. 2)ことを目指していたのだが、Belyea (1992)がいうように、そのような批判地図学はデリダほど根本的なものではない。ハーリーが示したかったのは、地図はありのままの現実を映し出す鏡ではない、ということである。それは、地図は澄んだ鏡ではなく曇った鏡である、といているのに等しい。彼の考えでは、カルトグラファーは「地図作成の諸段階——選択、省略、単純化、分類、階層化、『記号化』」(p. 11)、すなわち修辭技法によって地図を曇らせ(地図に仮面をかぶせ)、世界の「真」の姿を隠す。たとえば彼は、脱構築論文でも引用している自身の論文“Silences and secrecy”において、次のような発言をしている。

これらの地図は、ヨーロッパ流の彫刻スタイルでヨーロッパの風景を描いているが、アメリカの実際の肖像画とはほど遠い。本当のところそれらは、ヨーロッパが待ち望んだ風景を示しており、真のアメリカthe true Americaについては沈黙を保っている(Harley, 1988a: 70)。

しかしデリダにしてみれば、上述のように「現実」世界もまた解釈の産物なのだから、「真のアメリカ」などというものは存在しない。むしろ問題は、そのようなありもしない真実(真理)truthがいかにして生み出されるかである。

そしてこの真実をめぐる問題が、論文のタイトルに掲げられた「脱構築」に関係している。ハーリーがいうところの脱構築とは、地図の曇りを晴らし(仮面を剥がし)、その下に埋もれている(沈黙している)真実を暴き出すことであった。これまで示してきたとおり、これはデリダの考えからは導き出されない。デリダの脱構築は上述の真実の生産との関係で理解されなければならない。

仲正(2018: 303-304)にしたがえば、デリダの脱構築は、「ある“もの”の周囲に限界線を引き、概念的

に『構築』し切ってみせることを通して、その“もの”の内に“それならざるもの”が不可避免的に含まれることを明らかにする営み”である。たとえば科学的なカルトグラフィーは、さまざまな技法を駆使して歪みや誤差などを減らし、現実世界の真の姿(真実)を地図として表そうとする。しかし上述のようにデリダの考えにしたがえば、カルトグラファーが地図を作る際に念頭に置く「現実」の世界は、それ自体カルトグラファーによる解釈の産物である。カルトグラファーは現実世界なるものを暗黙裡に前提しているのだが、それは現実的でない世界(想像上の世界、主観的な世界など)を現実世界の領域から排除することによって成立している。つまり、現実的でない世界を(暗に明に)定義しながら現実世界を定義しているのである。その意味で、現実世界の「内側」にその「外側」であるはずの現実的でない世界が構成的に入り込んでいる。一般的には、このように、「精密な論理的体系に見えるものがその根底において抱えている根源的な逆説を明らかにし、自己解体に追い込むこと」(仲正, 2018: 303-304)が、デリダの脱構築であるとされる。

こうしたことを踏まえてSparke (1995: 4)は、ハーリーが行ったのは脱構築ではなく「脱神話demythologizeとして理解された方がよい」と述べる。「それは、中心的な標的として地図の客観性という神話を取り上げ、地図の下に構え、地図を反映的な文書とは反対の解釈的なものにし、それゆえ最終的に、地図があるものを示しながら別のものを隠すことを可能にする権力の動態の網を明らかにすることで、透明な窓としての地図という考えを批判する」(Sparke, 1995: 4)。クラプトンはより端的にハーリーとデリダの違いを指摘する。「ハーリーは、地図の真実は本質的に存在=現前するpresentが、それに付着する嘘、プロパガンダ、関心の下に埋もれている、と信じていた。そして、[地図の]真の意味を回復してそれについて問うことこそ、ハーリーの『脱構築』であった。それはデリダの脱構築ではなかったのである」(Crampton, 2011: 302)。

上記の引用文中でスパークは権力について触れている。内/外の区別の問題はハーリーの権力観にもつながっている。彼は脱構築論文の実質的な最終章において、フーコーの権力-知概念に依拠して地図の権力性を論じた。先述したように、彼は地図にとって外的な権力と内的な権力を区別し、後者の重要性を力説している。これまで見てきたことからわかるように、ハーリーが考える「外側」とは「現実」の社会であり、「内側」は地図というテキストの内容である。

所与の世界が所与の社会に暮らす人間の手によって書き表されたものが地図なのである。ハーリーは脱構築論文において次のように述べている。

社会における地図の影響の中心を占めるものには、カルトグラフィーにとって内的な権力として定義されるものもあるだろう。それゆえ問題は、管轄的な権力体系におけるカルトグラフィーの場所から、地図を作る際に作者が行うことの政治的影響へと移る(p. 13)。

この「地図を作る際に作者が行うことの政治的影響」が、ハーリーがいうところの地図の内的権力である。それは、修辞技法を通じて作者が利用者に特定の世界イメージを与え、世界の真の姿を隠すことを指す。この隠蔽が意味するもの(作者の意図)を読み取ることが「ハーリー流」の批判地図学である。

しかし、デリダがテキスト外なるものを退けたように、フーコーも書かれたもの(語られたこと)から作者の意図を読み取る態度を明確に拒否している。『知の考古学』においてフーコーは、自らが行う歴史研究を「考古学」と呼び、その原則について以下のよう述べている。

考古学が明らかにしようとするのは、諸言説のなかに隠されていたり表明されていたりする思考や表象やイメージやテーマや強迫観念ではなく、諸言説そのものであり、それとは別のものの記号として扱うのではない(フーコー, 2012: 262)。

考古学は、人間が言説を発したまさにその瞬間に、人間によって思考されたり、望まれたり、指向されたり、感じ取られたり、欲望されたりしたかもしれないことを、復元しようとするものではない(フーコー, 2012: 264)。

フーコーの「考古学」は、書かれたものの背後やそれに隠された意味などを読み取るのではなく、書かれたもののレベルでとどまって歴史を記述することを求める。ある“もの”が書かれたとはいかなることか、なぜそのように書かれたものが存在したのか、フーコーにとってはそうしたことが問題であった。また、フーコーの考えにしたがえば、作者が書物を通じて読者に対して権力を行使するわけではない。権力は、いくつもの書かれたものが類似性や関係性によってまとまりを成して知の客体(知るべき対象)を生み出すことにある。これに関連して、ベリアはハーリー

の批判地図学に対して鋭い指摘を与えている。

それゆえ問題は、「権力が地図言説を通じて機能する方法を理解すること」や、「世界を人間の選択が働く場所[と仮定すること]」ではなく、権力はその言説に属する非人格的で、区別不可能で、取り去ることができない側面 an impersonal, indistinguishable, unsubtractable aspects of that discourseだとみなすことである。科学的な地図は「風景から人間性を奪う」、「主体を寄せつけない知識を伝える」、というハーリーの異議申し立ては、フーコーの主要な論点を見過している (Belyea, 1992: 3, 強調原文)。

ハーリーにとって地図は人間の意図によって作られるものであり、彼はそこに権力性を見出した。しかし、フーコーは書かれたものを作者から明確に切り離し、権力は特定の人間からではなく、書かれたものの集合体(そこには地図も含まれる)から生じるとする。その意味で権力は非人格的である。

ちなみにハーリーは、フーコー自身の著作ではなく、ジョセフ・ラウズの *Knowledge and Power: Toward a Political Philosophy of Science* におけるフーコー解釈をもとにフーコーの権力論を理解している。Rose-Redwood (2015) によれば、ハーリーはラウズの考えも誤解している。その本では科学的知識と権力の関係が議論されているのだが、それはハーリーが考えるような、科学的知識に対して行使される権力(外的権力)と、科学的知識によって行使される権力(内的権力)、という区別をむしろ否定するものである。ラウズはブリュノ・ラトウールによる科学の人類学的研究を参照しつつ、「実験室の内部における現象の構築、操作、統制のための戦略は、近代科学に張り巡らされている権力関係のネットワークの一部とみなされなければならない」(Rouse, 1987: 3) と述べる。科学的知識なるものを生み出すこと自体が権力の作用であり、それは特定の人間の意図にもとづくものではないのである。

また、デニス・ウッドは別の観点でハーリーの人間中心主義的な権力観を批判している。

ハーリーは自分が何について語っているのかをわかかっていなかった。(…) カルトグラフィを理解しようとする彼の取り組みは、地図利用の沼にはまり続けていた。それは保守的かつ表面的で、決して地図そのものに入り込まない。ハーリーにとっての問題は、依然として人々が地図を用いて行った悪事であり、最終的に彼は、それによって地図それ自体が見えなくなった。ハーリーは地図を現実

の表象以外のものとは考えられず、言説機能として捉えられず、問題の核心が地図の使われ方ではなく地図それ自体だということを理解できなかった (Wood, 1993: 50, 強調原文)。

ウッドといえばハーリーと並ぶ批判地図学の旗手である。彼が1992年に発表した *The Power of Maps* (Wood, 1992) は批判地図学を代表する一冊とされる (Pickles, 2004: 60-65; Crampton, 2010: 18-19)。ハーリーとウッドは注目を浴びた時期が重なっていることもあり、しばしば同列に扱われるが、上記の発言からわかるように両者の考えは同じとはいえない。

ハーリーは脱構築論文で、その3年前に発表されたウッドとフェルスの“Designs on signs/myth and meaning in maps”という論文 (Wood and Fels, 1986) を一定の紙幅を割いて引用している。それは記号学者ロラン・バルトの考えにもとづいてノースカロライナ州の公式州道地図を批判的に読み解いたものである。ハーリーは自身の主張に説得力をもたせるためにその論文を引用したのだが、ウッドとフェルスがその論文で示したのは、地図を通じて作者の考えが読者に押しつけられる、などといったことではなく、地図は作者の関心 interest によって作られるにもかかわらず、地図自体が有する記号化作用によってそれが自然化され、あるがままの現実を映し出しているかのように振る舞う、ということである。そのような文化的なものの自然化がウッドの考える「地図に属する力 power of maps」である。

ウッドは別の論文で地図を作者から切り離された物 object としてとらえている (Wood, 1993a)。また、地図は人間の思考の内にある観念的なものとしてではなく、書かれた物 inscription として理解すべきだとしている (Wood, 1993b)。ウッドにとって地図の権力性は、その作者からやって来るのではなく、書かれた物として社会に普及する中で生じるのである。

クランプトンは、地図の人間性を強調するハーリーは地理学者ジョン・K. ライトに似ているとする (Crampton, 2011: 300)。ライトは第二次世界大戦の最中、地図が戦争の道具として利用されていることを受けて“Map makers are human: Comments on the subjective in maps”という論文 (Wright, 1942) を発表し、地図の主観性を論じた。そこで彼は次のように述べている。

地図上の画像は人間の手によって描かれ、人間の精神における働きによって操作される。それゆえすべての地図は部分的には客観的現実、部分的に

は主観的要素の反映である。完全に客観的な地図はありえない(Wright, 1942: 527)。

またライトの*Human Nature in Geography*にはこれとほぼ同じことが書かれている。

それゆえすべての地図は部分的には客観的現実、部分的には主観的要素の反映である。そうした事情はカルトグラフィーという芸術に関するすべての研究において暗黙的に扱われるのだが、主観それ自体が明示的に検討されることはめったにない(Wright, 1966: 33)。

このライトの発言はデヴィッド・ハーヴェイの*Explanation in Geography* (邦題『地理学基礎論——地理学における説明』、ただし該当箇所は未訳)でも引用されている(Harvey, 1969: 371)。日本でも同書の訳者である松本正美が「研究手段としての地図」という論文の中で、ライトのような地図観を「模写説 copy theory」(地図は現実を模写したものであるという考え)に代わる「構成説 theory of construction」(地図は主観的に作られるものであるという考え)として位置づけている(松本, 1977: 620)。またピクルスは、「ライトにとってマッピングは『自然の鏡』であるが、その鏡に映る像は地図の作者と利用者の主観的要素によって時折曇って歪んでいるのである」(Pickles, 2004: 36)、と述べている。詰まるところハーリーの地図観は、脱構築論文の40年以上前に示されたライトの地図観、そしてそれを引き継ぐ科学的なカルトグラフィーの発想と根本的には大差ないのである。クランプトンは次のように述べる。

ライトは「ジオソフィ geosophy」という言葉[地理的知識に関する研究を指すライトの造語]を作り出すにあたり、知識は動機と行動を駆り立てるものである、というとても近代的な考えを前面に出した。ハーリーは知識を権力の影響とつなぎ合わせるにあたり、このライトの考えを今っぽくフーコー風に更新しただけである(Crampton, 2011: 300)。

もう一点付け加えれば、ハーリーが脱構築論文で、「コンピュータに支えられた手法や地理情報システム [GIS] をカルトグラファーたちが採用するにつれて、地図を作る者たちの科学的な修辭がさらに耳障りになってきている」(p. 2)と述べていたにもかかわらず、鈴木(2012, 2013)がGISを用いてハーリー流の批判地図学を行っている(科学的修辭を用いて

地図の沈黙を読み取っている)ことも奇妙である。ハーリーの考えは彼の批判対象である科学的なカルトグラフィーにも応用できてしまうのである。

5. 脱構築論文の意義——その後の批判地図学

以上のように、ハーリーは脱構築論文の発想の「大部分がフーコーとデリダの著作にもとづいている」(p. 2)と述べておきながら、実際のところ両者とは異なる考えを示した。そして、社会性を重視するハーリーの地図観は、一見すると(当時としては)目新しいのだが、根本的にはかつてライトが示した人間中心主義的な地図観とほとんど変わらないものであった。だからこそベリアは、「ハーリーの晩年の諸論稿は、カルトグラフィーにとつての記号と指示対象との関係についてのフランスの著述家の根本的な再考を適用することとはほど遠く、従来からあるような、地図による地球物理学的特性の表象＝再現前に社会政治的側面を付け加えたにすぎない」(Belyea, 1992: 7)、と述べたのである。ただしベリアは続けて次のように述べている。「しかし、フーコーとデリダがより十分にカルトグラフィーに適用されれば、彼らの議論はわれわれに、世界のイメージとしての地図というオーソドックスな定義を疑問視させるに違いない」(Belyea, 1992: 7)。脱構築論文の意義はこの点にある。

現在の批判地図学の先導者ともいえるクランプトンは2001年の論文で、「ハーリーのプロジェクトはどのくらい成功したのか?」という問いに対し、それはハーリーの主張がどれほど高い評判を得たかではなく、実行可能な研究アジェンダを彼がどれほど十分に提供したか、という観点で判断すべきとしている(Crampton, 2001: 241)。そして、「もしわれわれが、社会的構築物としての地図、という戦略を進めるのであれば、ハーリーから開始し、かつハーリーを越えて行く必要がある」(Crampton, 2001: 242)と述べ、批判地図学の発展に乗り出す。彼は、ハーリーの考えをそのまま引き継いだり、捨て去ったりはせず、ハーリーが脱構築論文などを通じて示唆したこと批判地図学の新たな方向性を見出す。クランプトンにとってそれは、ベリアが提案したようにフーコーの考えをより十分に批判地図学に取り込むというものであった(Crampton, 2003, 2010)。

同じように、かつてハーリーから示唆を受け、*Ground Truth*を通じて批判GISの礎を築いたピクルスも、ハーリー流のアプローチを「批判」しつつ、フーコーとデリダの考えをより両者の著作に沿ったかたちで導入しながら批判地図学を進展させ、*A His-*

tory of Spaces: Cartographic Reason, Mapping and the Geo-Coded World (Pickles, 2004) にその成果をまとめた。

ここで詳しく論じることはできないが、そうしたクランプトンとピクルスの試みは、すでに1980年代から社会学や歴史学などで行われている。たとえば、社会学者の若林幹夫が1995年に発表した『地図の想像力』は、明らかにハーリーのものとは異なる批判地図学を展開しており、*A History of Spaces*と内容が似ている(若林, 1995)。1994年に発表された歴史学者トンチャイ・ウィニッチャクンの*Siam Mapped: A History of The Geo-Body of a Nation* (邦題『地図が作ったタイ——国民国家誕生の歴史』)も、科学的な地図が存在することの意味をナショナリズムの観点から議論するものであり、地図の沈黙を読み解くようなことはしない(Thongchai, 1994)。クランプトンとピクルスは、こうした他分野の知見を地理学的に解釈しつつ、批判地図学を進展させていった。

そして2000年代中盤以降は、人文社会科学全体が物質性materialityや情動affectといった、よりポスト人間中心主義的な問題を扱うようになったことを背景に、クランプトンやピクルスを乗り越えた、新たな批判地図学、あるいは「ポスト批判地図学」とも呼べるものが模索されている(Del Casino Jr. and Hanna, 2005; Kitchin and Dodge, 2007; Dodge, et al. 2009; Wilson, 2017; Presti, 2018; Rossetto, 2019など)。

最後は駆け足になってしまったが、こうした展開をみるに、ハーリーの脱構築論文は文字通り批判地図学の「端緒」であった、と筆者は考える。脱構築論文以後、批判地図学がどのような展開をたどってきたかは別稿で改めて検討したい。

付記

本稿の作成にあたっては、2019年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費、課題番号17J03406)を使用した。

文献

- 池口明子 2002. 解題: GIS論争. 空間・社会・地理思想 7: 87-89.
 伊藤勝久 2006. Brian Harleyの文化地図観. 環太平洋・アイヌ文化研究5: 37-47.
 上杉和央 2009. 過去の世界をめぐる認識・知識・想像力. 竹中克行・大城直樹・梶田真・山村亜希編著『人文地理学』ミネ

- ルヴァ書房. 199-213.
 小川都弘 1992. 中世荘園絵図のソシオ・カルトロロジー. 人文地理 44(5): 586-606.
 勝山貴之 2014. 『英国地図製作とシェイクスピア演劇』英宝社.
 小林茂 1978. 地図と言葉(その1). 理論地理学ノート 1: 18-23.
 鈴木晃志郎 2012. 地図学者からのアプローチ. 伊藤修一・有馬貴之・駒木伸比古・林琢也・鈴木晃志郎編『役に立つ地理学』古今書院, 2-14.
 鈴木晃志郎 2013. 外的表象としての史料——医学史における批判地図学の応用可能性について. 日本歯科医学史学会誌 30(2): 90-94.
 ジョンストン, R. J. 1999. 『現代地理学の潮流(下)——戦後の米・英人文地理学説史』地人書房. Johnston, R. J. 1997. *Geography and Geographers: Anglo-American Geography since 1945 5th ed*, London: Edward Arnold Publishers Ltd
 高田馨里 2013. 大型地球儀が象徴する戦争——第二次世界大戦期, アメリカ合衆国における世界認識の転換. 駿台史學 147: 169-202.
 仲正昌樹 2018. 『ポストモダン・ニヒリズム』作品社.
 長谷川孝治 1993. 地図史研究の現在——1980年代以降の英米の動向を中心に. 人文地理 45(2): 40-61.
 フーコー, M. 著, 慎改康之訳 2012. 『知の考古学』河出書房新社.
 Fiucault, M. 1969. *L'archéologie du savoir*, Paris: Gallimard.
 ブラック, B. 著, 関口篤訳 2001. 『地図の政治学』青土社. Black, J. 1998. *Maps and Politics*, Chicago: University of Chicago Press.
 堀淳一 1990. 「地図論」論. 津野海太郎・永野恒雄・野崎六助・田中勝也・塩見鮮一郎・堀淳一著『地図の記号論——方法としての地図論の試み』批評社, 161-181.
 松本正美 1977. 研究手段としての地図. 地理学評論 50(11): 617-634.
 モリッシー, J. 著, 阿部美香訳 2017. 視覚化された地理. モリッシー, J., ナリー, D., ストロメイヤー, U., ウィーラン, Y. 著, 上杉和央監訳『近現代の空間を読み解く』古今書院. 205-212.
 Morrissey, J. 2014. Illustrative geographies. In *Key Concepts in Historical Geography*, eds. J. Morrissey, D. Nally, U. Strohmayer and Y. Whelan, SAGE Publications Ltd, 280-290.
 若林幹夫 1995. 『地図の想像力』講談社.
 若林芳樹・西村雄一郎 2010. 「GISと社会」をめぐる諸問題——もう一つの地理情報科学としてのクリティカルGIS. 地理学評論 83(1): 60-79.
 Agnew, J. A., Livingstone, D. N. and Rogers, A. 1996. *Human Geography: An Essential Anthology*, Oxford: Blackwell Publishers.
 Belyea, B. 1989. Image of power: Derrida/Foucault/Harley. *Cartographica* 29(2): 1-9.
 Blakemore, M. J. and Harley, J. B. 1980 Concepts in the history of cartography: A review and perspective. *Cartographica* 17(4), Monograph 26.
 Crampton, J. W. 2001. Maps as social constructions: Power, communication and visualization. *Progress in Human Geography* 25(2): 235-252.
 Crampton, J. W. 2003. *The Political Mapping of Cyberspace*. Chica-

- go: The University of Chicago Press.
- Crampton, J. W. 2010. *Mapping: A Critical Introduction to Cartography and GIS*. Hoboken: Wiley-Blackwell.
- Crampton, J. W. 2011. Reflection essay: Deconstructing the map. In *Classics in Cartography: Reflections on Influential Articles from Cartographica*. ed. M. Dodge, Hoboken: Wiley-Blackwell, 295-304.
- Dear, M. J. and Flusty, S. 2002. *The Spaces of Postmodernity: Readings in Human Geography*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Del Casino Jr., V. J. and Hanna, S. P. 2005. Beyond the 'binaries': A methodological intervention for interrogating maps as representational practices. *ACME: An International E-Journal for Critical Geographies*. 4: 34-56.
- Dodge, M. ed. 2011. *Classics in Cartography: Reflections on Influential Articles from Cartographica*. Hoboken. Wiley-Blackwell.
- Dodge, M., Kitchin, R. and Perkins, C. eds. 2009. *Rethinking Maps: New Frontiers in Cartographic Theory*. London: Routledge.
- Dodge, M., Kitchin, R. and Perkins, C. eds. 2011. *The Map Reader: Theories of Mapping Practice and Cartographic Representation*. Hoboken: Wiley-Blackwell.
- Edney, M. H. 2005. The origins and development of J.B. Harley's cartographic theories. *Cartographica* 40(1/2), Monograph 54.
- Gregory, D. 1994. *Geographical Imaginations*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Gregory, D., Johnston, R., Watts, M. J. and Whatmore, S. eds. 2009. *The Dictionary of Human Geography 5th ed*, Hoboken: Wiley-Blackwell.
- Harley, J. B. 1976. *Ordnance Survey Maps A Descriptive Manual*, Southampton: Ordnance Survey.
- Harley, J. B. 1988a. Silences and secrecy: The hidden agenda of cartography in early modern Europe. *Imago Mundi* 40. 57-76.
- Harley, J. B. 1988b. Maps, knowledge and power. In *The Iconography of Landscape*, eds. D. Cosgrove and S. Daniels, Cambridge: Cambridge University Press, 277-312. ハーリー, J. B. 著, 山田志乃布訳 2001. 地図と知識、そして権力, コスグローブ, D.・ダニエルス, S. 編, 千田 稔・内田忠賢監訳『風景の図像学』地人書房, 395-441.
- Harley, J. B. 1992. Deconstructing the map. In *Writing Worlds: Discourses, Text and Metaphor in the Representation of Landscape*, eds. T. J. Barnes and J. S. Duncan, London: Routledge, 231-247.
- Harley, J. B. 2001. *The New Nature of Maps: Essays in the History of Cartography*. Maryland: The Johns Hopkins University Press.
- Harvey, D. 1969. *Explanation in Geography*. London: Hodder & Stoughton Educational. ハーヴェイ, D. 著, 松本正美訳 1979. 『地理学基礎論——地理学における説明』古今書院.
- Kitchin, R. and Dodge, M. 2007. Rethinking maps. *Progress in Human Geography* 31: 1-14.
- MacEachren, A. M. 1995. *How Maps Work: Representation, Visualization, and Design*. New York: Guilford Press.
- Perkins, C. 2018. Critical cartography. In *Routledge Handbook Mapping and Cartography*, eds. J. K. Alexander and P. Vujakovic, London: Routledge, 80-89.
- Pickles, J. ed. 1995. *Ground Truth: The Social Implications of Geographic Information Systems*. New York: Guilford.
- Pickles, J. 2004. *A History of Spaces: Cartographic Reason, Mapping and the Geo-coded World*. London: Routledge.
- Presti, L. L. 2018. Post(mortem) cartographies: Reframing the cartographic exhaustion in the age of mapping's excess, In eds. P. Barges-Pedreny, D. Chandler and E. Simon, *Mapping and Politics in the Digital Age*, London: Routledge, 149-166.
- Rose-Redwood, R. 2015. Introduction: The limits to deconstructing the map. *Cartographica* 50: 1-8.
- Rossetto, T. 2019. *Object-Oriented Cartography: Maps as Things*. London: Routledge.
- Rouse, J. 1987. *Knowledge and Power: Towards A Political Philosophy of Science*, Ithaca: Cornell University Press.
- Sparke, M. 1995. Between demythologizing and deconstructing the map: Shawnadithit's new-found-land and the alienation of Canada. *Cartographica* 32: 1-21.
- Taylor, D. R. F. 1990. Cartography into the 21st century. 地図 28(2): 1-5.
- Taylor, V. E. and Winquist, C. E. 1998. *Postmodernism: Critical Concepts*, London: Routledge.
- Thongchai, W. 1994. *Siam Mapped: A History of The Geo-Body of a Nation*. Honolulu: University of Hawai'i Press. トンチャイ, W. 著, 石井米雄訳. 2003. 『地図がつくったタイ——国民国家誕生の歴史』明石書店.
- Tsou, M-H. 2019. Cross the line: My response to the trouble of critical GIS. *Transactions in GIS* 23(1): 175-177.
- Wilson, M. W. 2017. *New Lines: Critical GIS and The Trouble of the Map*. London: University of Minnesota Press.
- Wood, D. 1992. *The Power of Maps*. New York: Guilford Press.
- Wood, D. 1993a. What makes a map a map? *Cartographica* 30(2&3): 81-86
- Wood, D. 1993b. The fine line between mapping and mapmaking. *Cartographica* 30(4): 50-60.
- Wood, D. and Fels, J. 1986. Designs on signs/myth and meaning in maps. *Cartographica* 23(3): 54-103.
- Wright, J. K. 1942. Human comments on the subjective in maps. *Geographical Review* 32(4): 527-544.
- Wright, J. K. 1966. *Human Nature in Geography Fourteen Papers, 1925-1965*, Cambridge: Harvard University Press.